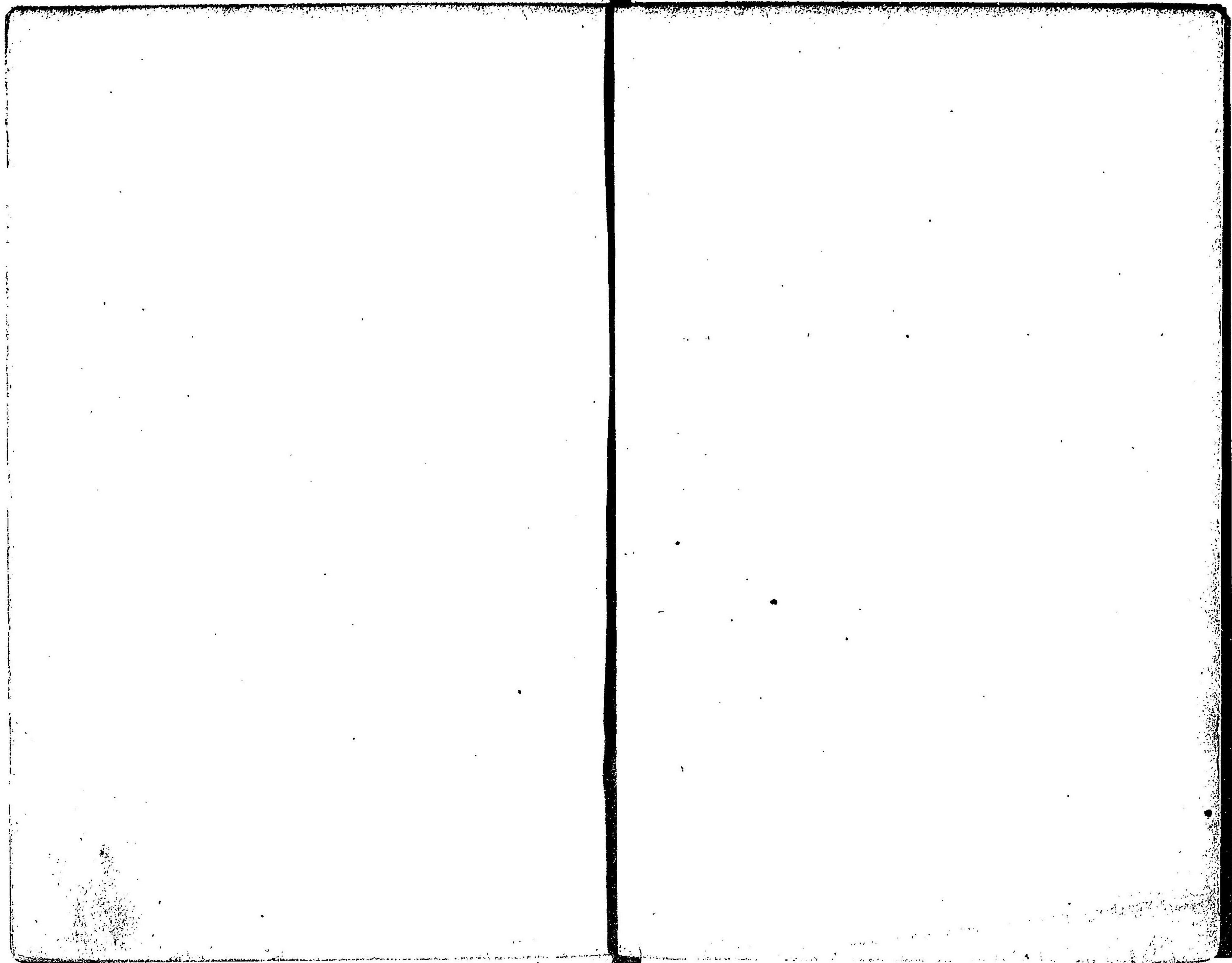


川田繁太郎著

天地人生之秘義

全

東京 合資會社 富山房發行



川田繁太郎著

天地人生之秘義

全

昭和  
40 12 19  
内交



東京  
會社  
富山  
發行

序言

凡そ人誰か天地人生の問題に多少思を費ざる者あらんや。人は或意味に於て總て皆な哲學者なりと言ふを得べく。從て何人も該問題に容喙しうる資格を有せざる可からず。予も斯る哲學者の一人にして。本書は即ち予の所信を告白し以て大方の示教を仰がんと欲し、數年前脱稿し、久しく筐底に秘し置きし者なり。

本書第三編迄は純正哲學の講究のみにして之を「純正哲學綱要」と題し得べきも、第四編に於て少しく實行哲學を附加したるが故に全書題して「天地人生之秘義」となせり。秘義と云ふも無論秘義を盡せるの意味にあらず、只だ或秘義闡明の意なるのみ。

純正哲學の講究は全て之を本書に見る如き宇宙論、本性論、認識論の、三科に分ち得べし。宇宙論は即ち現象の全體的攻究によりて天地深奥の理に到達せんとするものにして。本性論は特殊事相の本

性を攻究して万有の秘義を明にせんとする者なり。認識論は唯心派哲學にあつては純正哲學の全部を占有すれども、觀念界以外に實在界を認むる者と云へども其實在界と觀念界又は認識世界との關係を明にするため認識論攻究の必要を認めざるべからず。而して認識の價值を説明するには先づ實在の何物たるを知らざるべからざるが故に、認識論は順序として前二者の後に來るべきなり。因に曰ふ。認識論を哲學的攻究の初頭に置くべしとなす者なきにあらざるも、認識論は到底認識の價值を證明し得る者にあらずして只だ之を説明する者なるが故に、之れが最初に置かるべき必要なく、寧ろ後に來るべき必要あるなり。

南海の一角宇和島の僑居に於て

明治四十年九月

著者 識

# 天地人生之秘義目次

## 第一編 宇宙論

- 第一章 現象唯念論……………一
- 第二章 唯象論並に唯心論……………四
- 第三章 客觀實在論……………九
- 第四章 絶對實在論……………一八
- 一 雜多純一論……………一八
- 二 心靈的活動論……………二五

## 第二編 本性論

- 第一章 空間並に時間論……………三四
- 第二章 物質論……………四一
- 第三章 因果論……………五八

第四章 意志の自由に就て……………七〇

第三編 認識論……………

第一章 認識概論……………九〇

第二章 感覺論……………九七

第三章 理性論……………九九

第四章 思想と存在との關係……………一三三

第四編 人生論(名實行哲學)

第一章 人生の目的……………一四四

第二章 幸福論……………一五一

第三章 道德論……………一六八

第四章 宗教論……………一八三

(目次)終

# 天地人生之秘義

川田繁太郎著

## 第一編 宇宙論

### 第一章 現象唯念論

天地間の事物は千種万様なれども之を大別して主觀的現象と客觀的現象の二種となすを得べし。主觀的現象とは意志感情思考判斷等總て心裡の經驗を云ひ。客觀的現象とは山川草木人畜家屋などの如き所謂外界の事物を云ふ。客觀的現象は總て心外の實物にして心外に自存する者なり。は一般普通の見解にして何人も疑ふ者なし。雖若し吾人

にして一度哲學的考察に入る時は該見解は決して保持さ  
る可き者にあらず。所謂外物は一見實存する者の如きも、其  
實是れ吾人が感覺の狀態にして自身に存在する者にあら  
ず。即ち心内の表象にして心外の實物にあらざるなり。眼前  
の樹木は只だ吾が視る所のもの即ち吾が視覺の狀態にし  
て樹木其物にあらず。見らるる如き樹木が眞實其處に在り  
て吾れは其れを其儘に見たる者となし。所觀の樹木即ち實  
在の樹木なり。となすは妄見なり。若し吾人所觀の樹木即ち  
實在の樹木にして、所觀の實物全く同一なるに於ては、燈光  
消へて所觀の樹木消滅する時は樹木其物も亦た滅亡せる  
者と言はざる可からず。然るに樹木其物は消滅せず。燈火も  
共に消滅せる者は樹木其物にあらず。して樹木の視覺なる

にあらずや。故に知る可し。所觀の樹木は只だ樹木の表象に  
して樹木其物にあらず。感覺にして實在にあらざるを。吾人  
はまた赤き者を見、青き者を見る。否吾人の見る所は總て色  
なり。然れ雖色は只だ感覺の狀態にして、實存する者は「エー  
テル」の振動のみとす。赤きもの青きもの實存するにあらざ  
るなり。其他音響の如き香味の如き寒暖の如き皆な同じく  
只だ感覺に存する者にして實存する者にあらず。斯くの如  
く一切の現象は吾が心の狀態にして、假令心外に實物あり  
とすも此は其實物にあらざるなり。恰も石驗球上の万象  
又は鏡中の影の如し。石驗球上の万物は假象にして實存す  
る者は水泡のみ。客觀の現象亦た斯の如くにして實存する  
者は心識のみとす。現象唯念論は到底否定すべからざる眞

理に屬す。去れば万有は總て唯だ心のみにして、心以外のものは存在すべからざるか。是れ以下本編に於て考究せんことを欲する處なり。

## 第二章 唯象論並に唯心論に就て

前章予輩は客觀現象の主觀性を論じ、假令客觀に實物ありとするも客觀現象は其實物にあらずして、實物は現象以外に在るべきを明にせり。而して其實物の存否につきては未だ何等の斷定を與へず。雖常識は之れありとなし、吾人の現に視る所を以て直ちに之れなりとす。心理物理の諸科學も亦た感覺的現象の説明上此實物を假定す。惟ふに現象は總て認識状態なるも認識せらるゝ者なくして認識あるべ

心外實物の存否

唯象論又は實在的唯念論

からず。鏡中の花は他に眞の花なくして存すべからず。石験球上の万象はこれ他實在の寫影なり。去れば現象は心の状態なるも現象が存する所以の基礎として心外の實在を許すは自然且つ普通の見解に於て止むを得ざる者。云はざるべからず。然るに又た一方より考ふれば、心外の實在は假りに之れありとするも吾人が感覺し經驗する所の事物は其れにあらず。心外の實在は經驗を超越せる者にて認識界裏の者にあらず。即ち識るべからざる者なるが故に、之をありと云ふは知識上の僭越にして許すべからざる事。となし得べきが如し。斯くて感覺的現象の外何等の實在をも許す可からず。となすの論起る。是れを唯象論又は實在的唯念論となす。然れ雖若し此論にして正ならんか。吾人は個々の念



象の外何等の存在をも認むべからず。而して此等念象は生滅去來常なきものなるが故に、世界は一も同一の者あるを得ず。従つて人に責任なく物に定則を認めず。道德も學術も成立し得べからざるに至るなり。

抑も認識又は經驗を超越せる者即ち念象外のものは該超越の故を以て其れの存在を認むべからず。となせる右論法は正當のものにあらず。何となれば、經驗は經驗主なくしてあるを得ず。認識は認識者なくして存す可からず。識る者なくして識るてう事のみあり。となす。天下豈に斯る背理あらんや。認識は一の働作なり。而して物なくして働作あるを得ず。本體なくんば作用あるべからず。故に認識又は經驗の既でにある以上は認識作用の主體ありとせざるべからず。然

唯象論ノ  
非

るに認識の主體は認識する者にして認識せる所のものにあらず。認識を超越せるものにして認識中の事物にあらず。吾人の認識し經驗する所の事物は孰れも認識者又は經驗者なるべからず。故に認識者經驗者は到底吾人の認識し能はざる所なり。吾人の認識する所は總て是れ吾人の知識觀念にして實物にあざればなり。斯の如く認識主體は本來認識を超越せる者にして到底認識し得べからざる者なり。雖、其れの存在は之を認めざるべからざるが故に、經驗的認識を超越せる者は一切其存在を否認すべし。となすは誤謬の論斷にして、直接に經驗すべからざる者と雖時として其存在を確認せざる可らざる者あるなり。斯くて唯象論は保守すべからず。

以上、主観的超越實在の承認さるべきを論じ、以て總て現象を超越するものを否認せんとする唯象論の非を明かにしたり。然れ雖論者尙ほ曰はん。主観的超越實在は經驗者たる心の自身なるが故に經驗的現象のある以上否定さるべからず。雖客観の超越實在に至つては之と同一の論法を適用すべからず。何となれば是れ全く心外の他物にして心と同一なる者にあらざればなり。斯くて彼等は尙唯象論と同じく客観的超越實在を否定して客観的現象は全く虚妄なる者なり。とし實在は主観的心性のみにて一切現象は只だ心の作出する所即ち夢幻の如き者となす。之を唯心論又は實在的唯心論と云ふ。唯心論にも種々ありて所説一樣ならず。雖以上の點は何れも一致する處なり。而して之に反

唯心論

實在論

對する者を超越實在論又は單に實在論と云ひ、客観的超越實在を主張す。即ち心外に實物世界ありて客観的現象は其れの主観的表現なるを主張するなり。唯心論と實在論とは客観現象に關する哲學的説明上の二大思想にして、該抗爭の變形は遠く之を往古の思想中にも認め、哲學の歴史は該抗爭の爲めに其大部分を占めらるゝ者となす。實在は主観的實在のみにして常識の實在觀は根本的に迷妄なりとなすべきか。客観現象は主観的超越實在のみを以て充分説明され得べき者なるか。是れ次章に於て論せん。と欲する處なり。

第三章 客観實在論

吾人が經驗し認識する所は實在にあらず。と言ふは可なり。

論 絶待懷疑

雖、是よりして直ちに實在は認識すべからずとの結論に  
 到り、以て一切超越實在を排斥せんとするは誤れり。蓋し認  
 識する所は實在にあらずと言ふは、只だ觀念は實物にあら  
 ずと言ふに同じき者にして、吾人の認識は、凡て眞實の認識  
 にあらずと言ふ者にあざればなり。認識は實在にあらず  
 とも實在の認識たるを得るなり。感覺的現象を非實在とな  
 すは、未だ此れが實在を感覺せる者たるを否定せる者にあ  
 らず。故に吾人は未だ全く超越實在を認識し、又は思議し得  
 ずとなす可らず。加ふるに實在を思議し得ずとなし、吾人は  
 現象を直識するの外現象以上に何等の推究をも及ぼし能  
 はずとなす時は、是れ感覺以上の知識を總て否定し、學術道  
 徳等を否認する絶待懷疑論にして、而して斯の如き懷疑論

カントの  
因果論

は到底保持さるべき者にあらず。或は又た因果的考察は現  
 象事物間のみ適用せらるべき者にして、非現象事物に關  
 して適用すべからざる者なるが故に、非現象の事物は吾人  
 之を推知し得るの道なしと論ずるカント一流の如きあり  
 と雖、惟ふにカントの此論はこれ全く理由なき者とす。何と  
 なればカントは、只だ現象と思想との間に調和ある所以を  
 説明せるのみにして、現象外と思想との間に如何なる調和  
 もある可からざるを證明せる者にあらず。現象と思想との  
 間には假りにカントの説の如き調和ある者なりとするも、  
 現象外と思想との間亦た別に如何なる關係ありて調和あ  
 るものなるか知る可からざればなり。第三編認識論を讀め。  
 故に因果的考察を現象外に用ゆべからずとなし、非現象の

ものは其存在をすら推知するの道なしとなすカントの不可識説は其前提より來る。正當の結論にあらざるなり。去れば非現象、超經驗なる者は其の非現象、超經驗なるが故に、必ず之を排斥すべき理由なし。且つ主觀的超越實在の承認さるべき者なること前章論するが如くなるに於ては客觀的超越實在に云へども若し之れが現象説明上必要なる時は無論承認されざるべからざるなり。依て以下客觀現象が必ず客觀的超越實在に基くべき者にて主觀的實在のみに由りて説明され得べき者にあらざるを明にせん。

客觀的實在の必要

識る者あるも識らるゝ者なくんば認識は生すべからず。従つて感覺的現象は生すべからざるなり。故に唯心論にあつては其被認識者を能認識者自身となし、感覺的現象は心的

本體が自己を認識し經驗する者となし、主觀的實在のみに由りて現象を説明せんとするなり。然るに唯心論の認むる主觀的實在は單に認識作用の主體にして意志感情の如き者にあらざるが故に其本性全く純一のものならざる可らず。何となれば認識にあつては雑多なるものが總て同一の認識にして、甲の認識も乙の認識も同一なる我れの認識なり。雑多の認識は同一の認識なるが故に存し得る者にして甲を認識する者と乙を認識する者と同一ならずんば甲乙の差別的認識は存し得べからず。差別的認識にして存せざらんか。一切の認識は存すべからざるなり。而して認識の純一なるは認識主體の純一なるに由るが故に、認識の主體は之を絶待的純一性の者となさざる可らず。斯くの如く主觀

的實在の本性純一性のものなるに於ては、該實在が自己を認識せるものは是れ純一の認識にして、雑多の認識なるべからず。然るに現象は雑多の認識なるが故に、主觀的實在のみにては現象を説明すべからず。加之、認識は性質上差別的なるべく、純一の認識は無識に同じきが故に、唯心論の主觀的實在のみにては何等の認識も生し得べからざるなり。茲に於て吾人は認識作用の主體以外に被認識者たる雑多の實在、即ち所謂客觀實在を承認せざるを得ざるなり。唯心論は心識の純一性を偏重して雑多性を偶生的となすと雖、之と反對に心識の雑多性を偏視して雑多現象をのみ實在的となす者もなきにあらず。常識の實在觀及び唯物論の如きは是れにして、ヒュームも亦た心識の純一性を看過し

心識は別個獨立なる雑多觀念の來往する者となせり。カントは此誤を正だして心識の統一的事相を發揚し、且つ之れが雑多現象と同じき重要事實なるを發見せり。心識の純一性かくて始めて注意さるゝに至るや、之れを重視して終に極端に走れる者、是れをカント以後の近世唯心論となす。近世唯心論は即ちフイヒテがカントの所謂「自覺的統一」即ち心識の超越的統一性を過重して之を特に實在的となせしに始まる者にして、心識の純一性を偏視するは唯心論の論理的基礎たるのみならず、また之れが歴史的起源なりとす。フイヒテは斯くて超越的自我を絶待實在となし、一切の現象は唯だ此れが作出する所となせり。一切の現象は大別して經驗的自我、即ち自覺的心識と非我の二つとなし。經驗的

自我は絶待自我が非我に對して自己を自覺せる者にして非我あるに由りて存すれども非我は其實非我にあらず絶待自我が自己を他觀せる者即ち自己を見て其の自己たるを知らざる者なり故に非我は非我即ち外物として非實在にして唯だ自我の自覺を生ぜんが爲めに存する幻影のみ世界の實相は唯だ超越的自我の自己に對する認識的活動（情意的活動にあらず情意的活動なれば實在論となる）にして其れの全き自覺に達するを以て其目的となす者なりとなす是れフイヒテの學說の大要なりシエリング、ヘーゲル等はたゞ之を繼承し開發したる者にて根本の點に於ては之と同一の事を唱道す然るに絶待純一の自我に如何にして差別的認識生し得るか先づ何等の差別なき處には如何にすとも認識的活動生起し

唯心論は  
無根據な

得べからざるなり是れ唯心論の到底排除し能はざる難點にして自我の超越實在以外に雑多の客觀實在を許さざる限り到底雑多の現象は説明し得べからざるなり客觀的實在を認むるはまた人心本然の傾向に基く者にして唯心論は余りに常識に反したる者とす而して之れが斯く常識に反したる所以は因果的推測を現象外に及ぼすべからずとなせるカントの認識論を採容するの結果客觀實在を否認せるに由るなり然れ雖因果的推測を現象界以外に及ぼすべからずとなすは是れカントの認識論より必然的に來る可き結論にあらずるが故に唯心論は全く正當の根據なき者と云はざるべからず唯心論にして既に根據なく客觀實在を否定すべき正當の理由なきに於てはたご

ひ積極的理由なくとも常識的傾向に従ひ客觀實在を承認するは之れ至當の事とす。況んや既に論する如き理由あり且つ外に科學的攻究が客觀實在を證明する如き事などもあるに於てをや。

#### 第四章 絕對實在論

##### 一、雜多純一論

以上予輩主觀的超越實在を承認すると同時にまた雜多なる客觀的超越實在をも承認せざるべからざるを論じ、以て世界實在の純一なるべからざるを言へり。然らば實在は全く雜多なりと可きか。讀者は未だ予を以て多元論者なりと可ならず。實在は素より雜多なるべし。雖、是れが

ロツエの説

世界現象の本體たる以上、雜多の實在は互に相關係し連結し、其極竟ひに同一體を成せる者ならざる可からず。然らずんば世界の現象を説明し能はざるなり。蓋し万有は皆な相依り相基くものにして一として獨立のものなきが故に、該現象の基礎たる諸實在も亦互ひに相關係すべければなり。而して關係し連結すは一が他と存在を同じふする事なるが故に、相關係する諸實在は皆な同一の存在を有し、雜多なるものは、其實、純一の實在ならざる可からず。ロツエが此理を論ずる處聊か參考とすに足る者あり。左は即ち其要旨なり。

Aなる一物今Bなる一物と新たなる關係に入り來れり  
とせよ。而して之が爲めBがAに一働作を及ぼし一影響

を與へ得んが爲めには、唯だAがBと該關係に入り來れるのみにては未だ不充分にして、Aが今其處に來れりて、新事實をBが先づ覺知するを要するなり。若しBが夫れを覺知するなくんば、たゞひAが其處に來るもBは之を知らざるが故に、矢張り従前の通りに存在し、何の働作をも起さざるなり。故にBがAに對し新働作を起し得んが爲めには、前以てAの來れる事を知らざる可らず。即ちAの來れる爲めにBの中に、なる新状態先づ生じ、以て之れがBよりAに及ぼす新働作の基本と成らざる可らず。尙ほ換言せば、BがAに對し一影響を與へ得んが爲めには、先づAより一影響を受け之に由て新働作を誘起されざる可らず。然るにBがAより一影響を受くる爲めに

は、之を與ふるAに於て先づBより一影響を受けざるべからず。(即ち自分今まBと新關係に入り來れる事を知らざる可からず)而してAが之を受け得んが爲めにはBに於てまた同一の事あるを要す。斯くて無限に之を反復せざるべからざるなり。然れば物と物との間に他働的影響の絶待的開始あるべからず。影響を與ふる者は即ち之を受くる者にて、兩者は同一の存在なる可きなり。一物の原因的働作と他物に於ける結果的状态とは之を別とせずして同一事物の兩側面となさざる可らず。然らずんば物と物の間に於ける因果的影響は解すべからざるなり。全然別個なる兩絶對の間には如何にすとも他働的又は因果的影響あるを得ず。故に世界万有にして其間互に他



働的影響を交ゆる者なる以上、万有は根底に於て同一存在を有せざる可らず。

夫れ万有は同一存在中の差別なり。故にAなる物の一状態は其がAの状態たるの故に由りてまたBなる他物に於ける一感動なるなり。因果的關係の意義また茲に於て始めて明なりとす。万有の本體は無限又は絶対と呼ばる。純一的存在にして万有は該存在の種々なる變形ならざる可らず。因果的影響は表面は二物の間に存すれども、實は之れ絶対が自身に對してなす働作なり。絶対は己が存在の純一なるの故により、其のA物として存する處に於てaてう一状態(結果)を生ずるなくして、B物として存する處に於てbてう一状態(原因)を生ずる事能はず。かく

てaとbとは見ゆる處に於ては別なるも實はこれ同一なりとす。

絶対實在の真相

然れば實在は雑多なりとするも該雑多は全然別個のものなる可からず。即ち雑多の絶対なるべからず雑多にして純一、純一にして雑多なるもの、是れ絶対實在の真相とす。絶対實在は其自身に於ては純一なるも其が存在の仕方カタに雑多あるなり。

世界的實在の純一なる事は經驗的科學によりても亦た益々證明されんとする所なり。蓋し無數現象の成立を僅少の元素的物質によりて説明せんとし、尙ほ進んでは一切の万有を同一の運動又は勢力に歸せんとし、かくて千差万別の現象を本質に於て終に同一なりとなさんとするものは近

世科學の傾向なればなり。従つて哲學上に於ける一元的見解は到底止むを得ざる者なり。雖而かも極端に走つて實在を全く純一無差別となすは正當の見と云ふべからず。世界の差別亦た是れ實在的の者なるが故に。實在の無差別性をのみ認むる哲學思想が古來不健全なる人生觀を生出する如き怪むに足らずと云ふべし。蓋し哲學上に於て世の差別を否認し無差別靜虛を理想とするの結果は實行上に於て世の倫理的關係を無視して時に遁世的となり又は人慾を否認して世の進歩活動を阻礙せんとするに至るは當然の勢なればなり。儒教が實行に於て釋老二教に優る所以の者また其根本思想が世の差別を重んじ差別的道德を發揮する。と共に仁てう如き無差別的大觀念を有するに由るな

釋老二教の非

孔子の仁

り。孔子の仁は老子の道佛の涅槃など異にして差別と、共に存する無差別なるが故に、頗る實在に近き理想なりと云はざるべからず。

### 一、心靈的活動論

實在は雜多なれどもまた純一にして、雜多實在は同一絶待の分身なりと云ふべきなり。然るに純一のもの如何にして雜多なるを得るか。之れ如何に思考し如何にして矛盾を調和され得るか。惟ふに純一は實在の本質に存し雜多は其が存在の様式に存せざるべからず。即ち實在物自身は純一なるも之れが雜多の狀態に於て存在するなり。例へば吾人の心識に於ける如し。甲の認識と乙の認識とは別個の認識なるも而かも之れ同一の認識にして同一自我の動作なり。只

實在は心  
靈的なり

個人と世  
界

だに認識のみならず感情に於ても意志に於ても同一にし  
て、雑多なる心念は總て同一なる自我の心念なり。絶待實在  
亦た斯の如き者なるが故に、絶待實在は物質よりは寧ろ精  
神の如き者となすを至當とす。こにかく純一の本質が雑多  
の狀體に於て存在するこせば其雑多存在は其物の働作に  
存せざるべからず。即ち實在は雑多の活動にして其本性純  
一なるものこなきべからず。左れば雑多なる客觀實在  
間の差別並に客觀實在と主觀的實在との差別は只だ之れ  
が別個の活動たるに存するものにして、主觀的活動即ち精  
神作用の主體たる主觀的超越實在は即ち是れ客觀的諸活  
動の本體なり。故に主觀の特殊實在は現象的精神に存し、個  
人的自我の本體は世界の絶待的本體なり。茲に於て吾人は

個人の精  
神の靈  
妙の不可識  
其の說明  
力

更らに現象的精神が實在的にして物質等の如き非實在的  
なる客觀的現象と大に異なるものあるを看取するこ共に  
また個人の心靈の頗る靈妙なる所以を會得せざるべから  
ず。個人の自我は即ち世界の神我にして世界の本體なるが  
故に、個人の腦裏には世界万有の一切秘密を藏匿す。之れ個  
人的精神の不可識力を説明する者にして、即ち一種の卜占  
及び其他種々なる精神の不可識的動作のあり得る所以也。  
併し此は多く何人にもあるに非ず。或狂的人物に於て精神  
の異常的開發が時として根底の神性を偏頗的に發現する  
に由る者多し。雖人性の順當なる開發の結果終に該神性  
の圓滿なる發現を來す事亦た無しと言ふべき理由なし。  
客觀的實在が一種の活動なる事は經驗的攻究に由りても

亦た漸く認められんとする處なり。所謂外物は吾人に於ける外部的勢力の經驗にして、其本體は或は之を或種の運動なりとし又は之を單に勢力と稱し、とにかく之れが一種の活動なるは多數科學者の承認する所なり。而して個人的自我の本體が此客觀的活動の本體なる事。現象的精神が其儘實在的にして客觀現象が非實在なる事を併せ考ふる時は、客觀の實在的活動も亦た是れ精神の如き者なりとせずを得べく。従つて絶対實在は之を心靈的活動となし得べきなり。

斯くの如く個人的自我又は現象的精神の本體が結局客觀現象の本體なるに於ては、唯心論亦た眞理ありと云はざる可らず。蓋し唯心論も客觀の事物は主觀的自我の本體に基

唯心論の眞理

知力的活動の根本を得ず

く者となし、世界の本性は絶対自我の活動に外ならずとせばなり。然れ雖唯心論は絶対自我の活動を只だ知力的のものとなし且つ心外に實物的活動あるを認めざるが故に、予輩と大に異なる所あり。抑も知力的活動(即ち認識作用)は差別的實在なくして生ずべからざる者即ち相對的活動なるが故に、之を絶対的活動となし、之に由て一切差別を説明せんとするは誤れり。知力的活動は差別に基きて生ずるが故に、絶対純一の實在に先づ知力的活動あるを得ず。絶対實在の根本的活動は知力的活動の由つて生ずる差別的實在を生出する者なるべきが故に、之れ知力的活動の如き形式的虚影的の者ならずして實質的實物的のものなるべく。知力的活動は其の派生的活動なる可きなり。知力的活動既

でに派生的なるに於ては、主觀に於て根本的なるは情意的活動にして且つ情意的活動は實質的活動なるが故に、世界の根本活動は之を意志感情の如き者となし得ざるか。絶對は客觀事物の本體たるに共に主觀的活動の本體たるが故に、主觀の根本活動を認知し得る時は世界の根本活動は認知されし者となすを得べし。而して意志感情が主觀の根本的活動なる事は左の理由によりて證明し得べし。(一)認識は凡て他物に關する者にて認識者たる自我は之を認識すべからず。雖意志感情は純粹の主觀的經驗にして自我が自己を直覺する者なるが故に、換言せば認識は總て他識なるも意志感情には直接自識あるが故に、吾人は意志感情に於て特に自我の本性を發見し得るなり。然れ雖自我の絶

意志感情  
は純粹の  
主觀經驗  
なり

意志感情  
は現實の  
基礎なり

對本性は覺識すべからざるが故に意志感情は絶對自我の根本活動となさざる可からず。(二)且又意志感情は現實的生活の基礎にして、且つ總ての物に其現實性を附與する者なるを見るも之を特に實在的のものとなすをうるなり。總ての物は意志に關係するによりて現實となり實在視せられ意志に關係せざるものは只だ是れ空中の幻影にして無に均しき者なるなり。(三)知識は感覺の發達にして感覺は感情の根本たる感應と合一するが故に、意志感情を主觀の根本的活動となす時は認識作用は之より派生せる者となすを得るなり。次に意志と感情との兩者に就て之を見るに、感情は受働的なり。即ち個人なる者既に確立せる後に於て之れが他より與へらるゝ者にして、意志の如く能働的、自發的

にあらず。故に感情は差別に基く者にして差別を生ずる絶對的活動にあらず。従つて最根本なる主觀的並に絶對的活動は意志にありとなし得ざるか。

絶待實在  
は意志の  
如きもの  
なり

左れば絶對實在は意志の如き實質的なる心靈的活動にして。唯心論の唱ふる如き形式的なる認識的活動にあらず。認識的活動は該實質的活動あるが故に生じ來る者にして、且

絶待實在  
は無意識  
なり

個人的心  
識

つ差別的實在に於てのみ存する者こそす。絶對には自他なきが故に之れに何等の認識あるを得ず。絶對は只だ其の特殊的諸活動に於て或る自他の認識を得る者にして、之を個人的心識と謂ふ。個人的心識以外絶對に心識あるを得ず。世界の實在は情意的活動なる事以上論するが如し。而して該活動は表面雜多なるも根底に於て純一なる事亦之を言

へり。而して純一性は即ち合理性の基本なるが故に(即チ道理トハ中ノ純一ヲ云フナリ)世界の實在は根底に於て之を合理的の活動とすを得べきなり。左れば世の事物に於ける亂雜無意義、不合理は之れ只だ表相的、一時的の者にして、世は終に合理的秩序の實現さるゝに至るべき者となすを得べし。

## 第二編 本性論

## 第一章 空間並に時間論

空間と時間は現象界に於ける一種特別の事實にして、凡そ客觀の現象は一として空間時間内に存せざるはなし。而して此空間及び時間なるもの、本性如何。是れ本章の問題なり。先づ空間に就きて論ぜん。

吾人は空間を知覺すと云ふ。然るに空間の知覺なる者は之を檢するに只だ延長的物體に關する消極的知覺(即ち否認)にして、延長的物體が存在せざるを認識せる者に外ならず。故に是れ何等の積極的認識にあらず。何物をも知覺せる者にあらざるなり。然れ雖總ての無的知覺は空間的知覺にあ

空間の知覺

空間の本性

らず。音聲、香味等に關する無的知覺は空間的知覺にあらず。只だ延長ある物體の非存を知覺せる處に空間の知覺あるものぞす。故に空間の知覺は延長的物體の知覺に基く者にして、後者なくして前者あるを得ず。蓋し無の認識は有の認識に基くものにて、先づ一物を知る事なくして其物の無きを知る事ある可からざればなり。然れば空間なる者は只だ延長的物體の(實際的又は假想的に)存在せざるを云ふ者にして、何等積極的存在にあらず。従つて是れ延長的物體ある處に於てのみ認めらるべき者にして、是れ無き處には認めらるべからざる者ぞす。故に空間は現象界に於ては有る者とも無きものともなされ得べし。雖、若し實在にして全く物質的延長性なきものならんには空間は實在界に於て全

く存ずるを得ざるものとなす可きなり。然れ雖論者或は曰はん。空間の認識には積極的のもの全く無しとなす可からず。從て空間には特殊の積極的性質なしと云ふ可からず。固より吾人は空間の積極的認識を有せざるにあらず。即ち空間てふ特殊の概念を有するなり。然れ雖知覺に於ては吾人は物の空間的性質即ち延長性を知覺するの外に何物をも積極的に知覺するにあらず。空間其物は只だ抽象的に認識せらるる者にして即ち只だ概念に於て存在する者とし。而して吾人の概念によれば空間其物は只だ純粹の場所なり。又は純粹の延長なり。或は之を物の俱在にありとなす者あれども非なり。彼等曰く。空間時間の本性は只だ物の關係にある者にして。物の關係に二種あり。俱

在と續在是なり。空間の概念は俱在的關係の抽象的認識にして。時間の概念は續在的關係の抽象的認識なり。是れスペンサーの説なり。雖俱在は必ずしも空間的關係にあらず。非空間的事物にも俱在有るが故に。俱在的關係を空間の本質となすは正當ならず。空間の概念は物の延長性の抽象的認識より來る者にして。空間の本性は純粹の延長にあるなり。而して純粹の延長性は只だ物的屬性の抽象されし者にして自身に存在しうる者にあらず。が故に。空間てふ特殊物の存在は之を否定せざるを得ず。然れ雖空間の性質上述の如くなる以上。延長的事物ある處には空間ありとなし得べし。雖延長の物質は前編並に次章に於て論ずる如く單に現象的存在にして實在にあらず。が故に。實在に於て



## 時間論

は空間は無き者となすべきなり。  
時間につきても亦た之れと殆ど同様の論をなし得べし。普通の見解に由れば「時が過去る」[杯曰ひて、恰も時間てう特別の物存在するが如きも、吾人は實際只だ物の續在又は繼續を知覺するのみにて時間てう特殊物を知覺せず。且つ其所謂時間てう物の性質を吟味するも之れ到底存在し得べからざる者なりとす。時間なる物は「時を経る」[なご曰ふに由りて見れば過去未來に連亘せる無限且空虚なる一種の延長（空間的三延長と異なる第四延長とも云べき）にして、万有は總て其中を過古より未來の方向に進行する者の如く思はれ。又「時が過去る」[なご云ふに由りて見れば時間は自身に斷へず流行經過する者にて其本質は未來より過古に飛び行

## 時間の本

く諸瞬間の繼續より成る者なるが如し。而して前者見解に於ける一種延長なる者も過古未來に連亘せる諸瞬間の繼續に外ならずして、只だ之を靜止的に見たる者。後者は之を活動的繼續となす者なり。故に普通の概念に由れば時間なる者は兎に角諸瞬間の繼續に存するなり。然るに此諸瞬間なる者は之れ極端なる抽象に由りて認めらる可き數學的點にして無に均しく何等の存在にもあらざるが故に、時間の本性は純粹の繼續にありとなすべきなり。而して純粹の繼續は純粹の延長なご同しく只だ抽象的に認識さるべき者にして實存し得べき者にあらざるが故に、時間はまた實存する者なるべからず。實存する者は只だ物の繼續的活動にして、時間の認識は該繼續的關係の抽象的認識に外な

らざる者こそす。

或は曰はん。繼續的活動は時間内に存する者にして時間なくして存し得べからず。非なり。物の活動は其物の性質と其物と他物との關係に由りて規定され支配さるゝ者にして時間に基く者にあらず。時間の本質は空虚無力にして決して物の活動を支配し制限する者にあらず。故に繼續的活動は時間なくして存するものにして、繼起的活動あるに由りて時間ある者こそす。

時間は實在的なり

時間の本體斯の如くなれば時間てふ特殊物は何處にも存在せざるも、繼續的活動は實在に存するが故に、時間は空間と異にして或意味に於て實存的となし得ざるにあらず。

## 第一章 物質論

所謂外物の本性に就きては上編既に論究せる處あり。雖吾人は亦た經驗的攻究の方面より之と同一の決論に到達するを得べきなり。經驗的科學上より物質の本性を論ずる者に種々の見解あり。今其主要なる學説を大別すれば先づ元子説と非元子説の二つとなすを得べし。元子説とは物質を以て個別的なる雜多元子の結合より成ることなすものにして、非元子説は物質を全然一個のものとなし、之れが雜多元子の結合に成るてう觀念を排斥して、個々の物体は連續的なる同一物の異部分なりとなす者なり。非元子論の中には物質が生命を内有する者(即ち一種の活物)なるを認め、生物の説明を容易ならしむる物活説の如きあり。雖、從來の

元子説と非元子説

理化學的攻究は一般物象の説明上元子説の方を便利なりとし、非元子説は殆んど採容されざるに至りしを以て、以下余輩は失つ元子説につきて講究せんと欲す。

元子説にまた數種の異見あつて存す。一は即ち固体元子説又は微物的元子説にして元子を以て極微の物塊となす者なり。該説の起源は之を遠く希臘哲學の中に發見す。第二は各元子を延長性なき非物質的の者となす説にして假りに之を非物的元子説と名じく。ボスコヴィチ之を開發唱道し近年フハラデイ等之を採容せり。第三は元子を或る全き流動物の渦漩なりとなす者にしてサー、ウイリヤム、タムソン等の唱道せる處とす。近時の學説にあつては、先づ微物的元子説の最も完全せる。

元子論  
三種類ノ固体元子  
説

維多の固体元子と該元子の存在に必要なる空處とを假定し、其他尙ほ勢力なる者ありとなす。勢力は物質とは性質の全く異なる者にして、物質に由りて説明し去られ能はず又物質を説明し去るを得ざる一種特別の者にして、然かも物質を離れて別に存在する者にあらず且つ勢力を有せざる物質は有らざるなり。勢力は物質とは異なれども常に物質に附着属住する者にて、兩者の内的關係は未知に属す。個々の元子は只だ受動性の個体にして其活動は總て之に内住する勢力の働に基く者とす。各個の元子は此力に由りて相互に結着せしめらるゝと同時に、又常に或距離に於て互に相隔離せしめられ、相接觸せずして存する者なり。是れ現今に於ける微物的又は個體的元子説の梗概とす。予輩は前章

空間論に於て空處なる者を否定せしが、茲には假りに之を許容し置く事となす可し。而して専ら元子の性質に就きて考ふるに、抑も元子の固體性を唱道する所以は現象的物質の固體性即ち延長抗拒の性質を説明せんが爲めに外ならず。然れ雖該元子説に由る時は、各元子間の距離は物體の延長性を説明し得るが故に物の延長は元子間に於ける引力と斥力の平衡より結果する者となさるゝなり。次に物質の抗拒性も其斥力より結果すとなし得るが故に、物質の固體性は全然勢力の結果として説明し得らるゝなり。故に物質の固體性を説明せんが爲めに各元子を固體的(延長的)物質となす可き必要は全く存せざる者云はざるべからず。然れば固體元子説の尙ほ幼稚にして未だ勢力の假説を有せ

ざりし時にあつてこそ、物質の固體性を説明する爲めに元子の固體性を要せしなれ。既に勢力説の附加されし今日に於て尙ほ元子の固體性を維持し各元子を延長性の物質となすは少しも必要なき者なす。若し勢力なる者は自存する能はずして或他物に属住すべきが故に勢力以外の物質を要すと云はんか。然れ雖存在は物質のみなる可きの理なく心の如きも自存し得るが故に勢力の住家には必ずしも物質を要せざるなり。況んや固體的元子は眞の物的元子たる能はざる理由他に存するに於ておや。其理由とは如何ん。眞元子は物質を成立せしむる最單位の要素を謂ふ者なれ。雖固體的元子は延長性を有し、延長性を有する者は無限に分割さる可きが故に、固體的元子は之を最單位的元子となし

能はざる事是れなり。然れば吾人は物質的元子を排し、物質勢力二元論の代はりに勢力一元論を採用し、勢力が物質に由て存するに非ずして或自存的勢力を物質の本性となさば如何。惟ふに是れ當然の見解にして、晩近の思想は勢力一元説に傾きつつあるなり。スペンサーの説には曰はく物質の主要なる二性質中延長性は抗拒性に由て説明さるゝが故に物質の根本的性質は抗拒性にありとなさざるべからず、然るに抗拒は勢力の結果なるが故に所謂物質は只だ外的勢力に關する吾人の經驗に存する者となすを得べし。而して該勢力の本性はこれ吾人の知り得べからざる處にして之を不可識的勢力と謂ふの外なし。斯くて彼は物質の本體否な一切事物の本體を或る不可識的勢力に歸せり。元

非物的元子説

子説にして斯くの如き非物質的見解を採り以て物質現象を説明せんとする者、之を非物的元子説となす。非物的元子説は元子の物質的性質を排除して、各元子を延長なく従つて分割す可からざる數學的點となすが故に、各元子は所謂礙竄性を有せずして二個の元子同一の場所に存し得べし。且又各元子は或質量を有し之に勢力を宿す。雖各元子は殆ど只だ勢力の中心たるが如き者なり。元子の固體性が物象説明上全く不要に屬し而かも尙ほ元子的見解の必要なるに於ては、該考説の前説に比して一層進歩せる者なるは否む可からず。抑も希臘人の唱道せる古代元子論にあつては固體元子をのみ認めて勢力の認識不充分的なりしが爲めに、元子の固體性に由りて物質の固體性を説明

するの要ありし耳ならず、物體の變化、運動を説明するに於て頗る困難を感じたりき。近世の固體元子説は固體元子に勢力を附加するによりて物の性質及運動の説明上古説の欠點を補ひたりと雖、之が爲め又た元子の固體性を無用の長物たらしむるに至れるを以て、茲に又た固體を除き去て殆んど勢力のみの元子説を唱道し、古説と反對にして而かも同じく一元的なる非物元子説を生出するに至りしなり。然れ雖純粹の勢力なる者は只だ概念に存し得る者なり、本體(即ち力を働かす者)なくして力のみあり得ざるが故に、非物元子説は各元子の本體を以て或形而上的且つ非延長的の存在を認めざる可からず、斯くて終に雜多の心靈的活動を認めて漸次眞理に接近し來るべき也。

渦旋論(又は渦動説)は現今物理學上の所謂元子には重を置かざる者なり。曰く物質が無限に分割さるべしと否とに拘らず、之を分割し行きて尙ほ分割を行へば其性質を一變すべき點に到達すべし、その性質を變せずして分割し行かるべき極限こそ即ち其物の元子にして、而して該元子は絶對に連續的なる或流動物(即ち「エーテル」)に於ける渦旋なりと。渦旋論は斯の如くして元子的見解を保持すると同時に物質の本性を運動に歸し、一種の方法に由て勢力一元説に近かんとする者なり。渦旋論は晩近元子説の最も進歩せる者となすべく、殊に「ラヂウム」杯の新發見以來一般の傾向一層此種の見解に歸しつゝあるを見る。只だ最近の學説にあつては從來の元子に代ふるに電子てふ一層靈妙なる者を以

てし之を究極的元子となせども、其電子なる者矢張り「エーテル」中の或運動に外ならざるが故に、根本の見解渦旋説と異ならず。然るに、其根底的物質たる「エーテル」の性質、矢張り物質的なるに於ては復た其物の元子を尋ねざるべからず。斯くて渦旋論を繰り返へさるべからず。加之「エーテル」を物質的の者となさんには物理学上また種々の不都合あり。蓋し「エーテル」の性質は物理学上よりするも決して物理的に思考さるべき者にあらざればなり。斯くて物理的研究も終に物質の本性を非物理的の者となし行くなり。こにかく根底的物質は非物理的の者となさざるべからず。斯くて渦旋論は終に物質の根底に心靈的存在を認むるに至らざるべからざるなり。

## 物質と勢力

物質の無限可分性の如きもまた之れ物理の本性が心靈的なるを示す者なり。且つ又た根底的物質を心靈となす時は運動や勢力の本性をもよく理會し得せしむる。こ共に物質と勢力を同一の者となすを得る也。抑も勢力は物質にはあらざるも物質を離れて自存する能はず。常に物質に寓居するは之れ勢力が自身に本體ならずして或本體の作用に存するに由る者。こす。然れ雖物質を以て此れが本質となすは非なり。勢力は常に物質に寓居し物質は自存的の本體たるが如きを以て一見すれば物質を體として勢力を其用となせば可なるが如し。こ雖物質を體とし勢力を用となす時は是れ物質を他に勢力を待たずして自身に活動する。自活物となす者にして即ち物活説なり。然れ雖斯の如きは實際所

謂物質にあらず、實際の物質は死靜物なり。只だ受動的に動く者にして、他より力を與へらるゝなくんば、自身は何事をも爲し能はざる者なり。之を物質の惰性と謂ふ。物質の性質斯の如きが故に通常勢力は物質と別なりとし、物質の外に勢力なるもの認めらるゝなり。故に物質は決して勢力の本體たる能はず。否な寧ろ勢力を以て物質の本體となし、前者に由て悉く後者を説明するを得る事前已でに論じたる所なり。去れど勢力も亦た之れ自存的の者にあらず、以て物質の基本たり能はざるは已でに論じたる處に由て明なり。兎に角勢力の本體は之を物質にありとす可からず、若し強ひて之を物質にありとなさんと欲せば、物質の性質を變更して自活的のもの、物質的ならぬ者、即ち心靈的のものとな

さる可からず。予輩を以て之を見れば物質の本性は即ち斯の如き者にして、而して之れが又た勢力の本體たるなり。物質と勢力とは兩者以外に同一本體を有する者にして、自存し得ざる勢力が物質の本體なるにあらず。又死靜的物質が活動的勢力の本體たるにもあらず。勢力は即ち該本體の活動に存し物質は該活動の成果たる一現象なり。以上物質の本性が心靈的のものなる可きを論究せしが故に、讀者は茲に於て自然物質と精神の關係に想到するならん。物質の本性既に心靈的なるに於ては物質と精神は其本性に於て之を同一なりとすべく、心物二元論の許容す可からざるは明白となる也。然れ雖物質の本性を單に觀念なりとす、唯心的一元論は精神の本體を物質にありとす



唯物的、一元論、と共に、同じく、謬論なり。物質は單に心の表象のみにあらずして其本體は心外別に實存するなり。心外に實存すと雖而かも此れ心靈的のものにして且つ吾人精神と同一體のものとする。世界萬有の本性は純一的心靈の活動にして精神と物質何れも該活動の發顯なり。精神は其稍々完全なる發顯にして死靜的物質は其一層不完全なる表現なりとす。物質と精神は斯の如く只だ表現の異なる者にして其本體は同一なり。フイヒテが外物は實在が自己を他觀せる者なりと言へるは予輩亦た他の意味にて其の眞理なるを認む。所謂精神は心靈的實在が自己を自覺せる者なるも外物は之が自己を客觀せるものにして其實兩者同一物なるべきは、精神と身體の關係に於て一層之を明認し得べ

實在ノ差別  
無差別  
ト物質

し。精神と身體の本體とは同一なる心靈的活動にして、絶對が該活動に於て、自己を、主觀する處、即ち、精神にして、他觀又は客觀せる處、身體なるなり。物質は總て絶對が所謂外部的感性により自己を感覺せる者にして、心靈的存在を延長性の物質と見るは感性の然らしむる處とす。物質の本性心靈なる事はまた世界本體の差別的なると同時に無差別的なる事より推知され得べきなり。差別的にして且つ無差別的なる物は世上の事物に於て往々之を認めざるに非ず。總ての組織體は是れなり。蓋し組織には別個の部分と全體の統一との同存を要すればなり。動物植物又は國家等の如き各有機物其他諸種の人工的機關の如きに至る迄皆是れ差別と共に或無差別性を有する者にして、而し

て無差別性は殊に其組織の生命たるなり。生物的階級の高下亦た主もに無差別性の發達に基く者にして、高等の生物は差別的諸機關の益々複雑なると共に之が統一の一層完全なる者を云ふなり。而して該統一の最完全なると共に差別的方面も最も發達し、差別と無差別共に最も完全なる者は現象界にあつては精神現象の外に之を求む可からず。蓋し精神にあつては差別頗る微妙複雑なる上に甲の念と乙の念とは全く同一の自我にして其無差別性完全なればなり。故に差別的なると同時に無差別的なる世界實在の發現は精神に於て最も完全なりとなすべく。質は只だ差別性のみなるが故に、之れ只だ實在の一側面のみを不完全に表現せる者となすべきなり。

物質ノ進  
化

實在は差別的なると共に無差別的なる者にして精神は之が圓滿なる發現に存し物質は只だ其差別性の或發現に存する者なりとせば、質の差別性を益々發達せしむるに同時に漸次高等なる統一性を其上に發現せしむる時は、物質は次第に化して心靈性と成り行かざるべからず。身體組織の發達或程度に達して其處に精神現象を生ずる者之れが爲めなり。精神は物質の發展に生ずる者にして兩者の間に連續あり、兩者全く別物にあらざる事は、精神活動が物力の消費に由りて存立する事、精神の開發が身體の發育に伴ふ事、心的事件と身體事件との間必然的連結ある事等の事實に徴するも否む可からざるなり。

且又進化なる者は、スペンサーの云へる如く物の分化的開

發と統一的發達の兩要素より成る者なりとせば、實在は已に云へる如く差別にして且無差別なるが故に、進化とは即ち實在的本體の發現を謂ふ者なり而して進化が實在の發現方法なるに於ては進化の頂點に近づける者は最も實在に近き者と云はざるべからず。アリストテレス曰く、物の真相は其の發達の終極の狀態に存すと。而して精神は分化統合の最も完全なる者なるが故に此れ進化の頂點にある者とすべく。従て世界事物中最も實在に近き者とすべしなり。

### 第三章 因果論

因果とは何ぞや。甲乙二物あり。其一物[甲]が他の二物[乙]に働

原因ノ意  
義

作を及ぼすに由りて乙物の上に新狀態[丙]を生ず。茲に於て乎、甲を原因と呼び丙を結果と稱するなり。然れ雖また乙を以て丙の原因とすを得べく。又た甲乙合して之を原因となす事をも得るなり。樹木成長の原因は之を土地の養分、太陽の光熱等に皈するを得べく。或は最初の種子境遇其他一切の事情を總括して之が原因となすをうるなり。然れ雖普通所謂原因の意義は事件を生ずる總事情の中特に其最も主要なる一因子を指す者にして、他は總括して條件なる一名稱の下に置くなり。即ち一定の事情既に具備せる上に於て茲に一結果を生出せる特殊事情を指して特に之を原因と謂ふなり。去れば普通所謂因果的關係は甲と丙との間に存するものにして、乙と丙の間に存する者は只だこれ變

化のみ。即ち一物が他物の働作加はれるに由りて自己の状態を變化せるのみ。通常原因と云ふは此被變物を指さずして能變者を指すなり。強て言へば因果も一種の變化にして原因の或物が結果に變現する者なれども、因果的關係は他働的働作のある處に存し、變化は全く受働的状態に存す。斯くて原因は或働作の本源てう義を有するなり。

普通原因と謂ふ者多く右説くが如し。雖然かも甲乙兩者何れも丙に對する一種の原因たるに相違なし。アリストテレスは甲を働作原因若くは作成原因 (efficient cause) と謂ひ、乙を材料原因 (material cause) と謂ふ。(アリストテレスハ此ノ外向ホ形式原因結局原因ヲ通シテ作用シ三者同一下見做ナチ得ルナリ)。原因とは必竟一事變の原づく所、一物の因て生ずる所を曰ふものにして一が他に基づく處には其間

因果的關係の本質

必然的連続的因果關係の本質にあらず

或種の因果的關係あるなり。故に因果的關係の本質は依頼的關係にあり。て、結果は原因に依頼して存する者と云ふを得るなり。結果の存在は原因の與ふる處にして原因の存在の一部又は連續なり。故に原因と結果は其關同一の存在を有する者にして、兩者は正さに同一事物の兩端又は異部分と見るをうべきなり。

或は曰ふ。因果的關係の本質は必然的連續にあり。結果の必ず原因に伴隨し、或事件には必ず或結果の件ふ事、是れ因果的關係の心髓なり。然るに予輩を以て之を見れば必然的連續は因果てうもの、特殊意義にあらず。原因と結果は、只だ其間必然的連續ある故に原因結果なるにあらずして、原因結果なるが故に其間必然的連續あるなり。晝夜の連續の

如き、四時の循環の如き、之れ必然的連續なれども因果的關係は此處に存せざるにあらずや。因果的關係の主なる意義は依頼てう事にあり。結果が原因に基づきて存し兩者の存在同一なる事にあるなり。

以上は只だ因果てう事柄の意義を明かにせるものにして斯の如き事が果して客觀に存在するや否や、換言せば物の本性に果して因果的關係ありや否やは未だ斷定せざる處なり。精密に言へば客觀事物間に於ける明白の關係は只だ異狀體の空間的又は時間的の接續のみにして、其間に依頼的關係ありしか存在の同一ありしか言ふは目以て之を認め得べき事實にあらず。故に因果的關係の客觀的存在は決して明白なる直覺的事實にあらざるなり。然らば客觀事物

因果的關係の客觀存在

間に因果的關係ありこなす常識的見解は果して正當なる者なりや。之れ曾て大に學者の頭腦を悩ませる問題なり。雖因果的關係の意義を上如く解し該關係の本質を源因結果兩者の同一存在に歸するに於ては、右問題の解決は困難なるものにあらず。實在は已に論したる如く純一にして而かも難多の活動を有し、雜多の客觀的事物皆な同一の存在にして其可視的差別中に不可視的同一を有するが故に。因果的關係の本質が事物間の依頼又は存在の同一てうことにある以上、因果的關係は事物の本性に存しうる者となすを得べし。

唯り因果的關係のみならず變化てう事も亦た之と同一なりとす。蓋し變化てう事も之れ明白なる直覺的事實にあら

變化論

ずして、明白なる事實は只だ異状態の更代的繼續のみ。即ち一状態去て他の状態代はり來る事のみ。然れ雖之れのみにては未だ變化てうものにあらず。之れが變化たらんには前後の別状態は同一體ならざるべからず。異者の更代的繼續は之れ未だ變化にあらずして生滅のみ。又た單に更代のみ。變化とは或同一物が一の状態より他状態に遷るを云ふものなるが故に、更代繼續する異状態を通して同一のものなる可からず。該同一の貫通なき者は之れ變化にあらずして別個體の生滅去來なり。然れ雖該同一は目もて見得るものにあらず、見ゆる處は只だ別者の來往のみなるが故に、上説の實在論にして採容されざる以上變化の事實も亦た疑はれざる可からず。

事物の因果的關係が實在的のものにして従つて該關係に關する吾人の認識が正確のものなる事以上論ずるが如くにして説明され得べし。雖此は是れ近世哲學の大問題たりしものにして、英國の哲學者ヒュームノ如き因果的認識の正確なる所以を説明し能はざる者なりき。蓋しヒュームハ因果的關係の心髓を必然的連續にありとし、且つ其必然的連續は只た心の習慣によりて事物間に認めらるゝ者にして眞實之れが客觀に存在するや否や不明の者となせり。彼謂へらく、吾人が甲を原因とし乙を結果とするは乙の必ず甲に伴ひ生ずるを認むるに由る。雖該必然的連續の認識は全然外界事實に基ける者にあらずして心の習慣に基く者なり。心の習慣とは何ぞや。乙の現象同一の場合に於て

常に甲の現象に連続し来るを見る時は、甲の出現に次いで乙の出現を想ふの習慣自然に心中に生じ、爾后甲の出現を見る毎に乙の従ひ来るを預期するに至る。斯くて自然に兩者の連續を必然的の如くに思ふなり。斯くの如く因果の認識は全然客觀的事實に基かずして大に主觀的要素の加はるが故に正確なる客觀的知識たるを保すべからず。ヒュームハ因果的認識の價値を説明する能はず、只だ實驗上の證保によりて之を信するのみなりき。謂ふに因果的關係の心髓は已でに言へる如くにして必然的連續にあらざるが故に、該關係の認識作用に關するヒュームノ說亦た誤れりと言はざるべからず。假りに因果的關係の心髓を必然的關係にありとするも該必然的關係の認識は單に習慣に基け

其批評

る連想作用より生じ来るものにあらず。もし習慣に基ける連想作用ならば、新たに甲の出現せる時只だ乙の次で生じ来るを思ひ浮かべ、若くば、若しも乙が出で來らんかと思ふのみなるべけれども、實際は然らず。吾人は甲を見るごとき乙の必ず随ひ來るべきを必至的に斷定し確信するなり。故に之れ單に習慣的連想に由れる空想にあらずして別種作用に由れる必至的認識なり。因果的認識を生ずる者は高等なる認識作用にして、該認識作用の與ふる認識が必至的にして且普通なるは感覺の與ふる所と同一なりとす。若し之れが主觀作用なるが故に、其客觀的價値感覺と同じからずと云はんか、感覺も亦主觀作用なり。前者は只だ高等複雑なる感覺なるのみ。且つもし該高等作用の知識的價値疑はれん

が、一切の認識は疑ふべきものとなり、疑ふべしとなす思想其物も亦た疑はるべく、結局自殺的懷疑となるが故に、之れ決して疑ふべきものにあらず。之を廣義の理性作用と云ふ。次編に於て之を攻究すべし。

ヒュームに次で起り、因果的認識の正確なる所以を説明せんとせる者をカントとなす。カントは因果的關係が客觀の現象界に存する事と、吾人の因果的認識が其客觀事實と符合する所因とを説明するに下の如き考説を以てせり。曰く、抑も客觀現象なるものは其實心外のものにあらずして、外部感性より供給さるゝ、雜多感覺を材料とし之に或心作用の施さるゝに由りて成立せる心象界なり。或心作用とは何ぞ。吾人の思想には根元的の形式あり。此形式は心が先天的

カントの  
説

に有する所の者にして、吾人の思想作用は總て此先天的形式に従ふものとす。而して外來の感覺を材料とし之に一定の形式を與へて現宇宙を構成する者亦たこの思想形式にして、外物の感覺心中に入り來る者悉く該形式に由つて整列され、かくて現象界構成さるゝなり。左れば客觀事物の關係を規定する原則は思想の活動を規制する原則と同一なるが故に、思想が必至的に斷定する處は必ず客觀の事實と符合せざるへからず。而して因果は右云ふ思想の先天的形式の一なるが故に、因果的關係の實存すること並に該認識の正確なる所以共に是れ理會し得べきなりと。然れ雖該考説は只だ吾人の思想と感覺的現象との間に符合ありうる所以を説明するものにして、外來的感覺の本源たる外物即



ち外部的又は客觀的實在と思想との調和を説明し能はず。故にカントは斯の如き外物に關する認識につきては、其價値を疑はざるを得ざりき。是れカント説の未だ不充分なる所以とす。カントの學説は決して外部的(越超實在を否定し得るものにあらず。予輩の見る所を以てすれば、吾人の思想にはカントの見る所よりも一層深奥なる性質ありて、之れが爲め先づ思想と超越實在との間に調和あるに由りて思想と現象との符合もありうるなり(次編認識論ヲ讀め)。

#### 第四章 意志ノ自由ニ就テ

個人的意志即ち現象的意志の性質果して自由なる者なるや。此れ古來最も多く論ぜられたる問題の一なり。唯ふに意

意志の自由は全く否定すべからず

志の自由は全く否定さる可き者にあらず。若し人にして全く意志の自由なき者なる時は、道德なる者は存在す可からざるなり。道德は其根本に於て人の或自由を假定せるものなり。即ち善を知て自ら之を爲し惡を知ては之を避けんと欲し得る力の人に存するを假定せる者なり。若し此力此自由なきに於ては何々を爲すべし何々を爲すべからず。蓋し可し可道德法は全く意義なき者とならざる可からず。蓋し可し可からず。てふ事は其者が其れを爲し得ると同時に其反對をも爲し得る事を意味すればなり。草木には自由の行爲なし。故に其活動を律する者は自然法のみにして、道德法は之れに存せず。去れば人に或意志自由ある事は到底否む可きにあらず。去れど此は只だ關係的自由にして絶對的自由には

あらず。即ち道德法等の如き理想上の法則に束縛されざる自由にして自然法の必至的束縛を脱したる者にあらず。又た普通に人の認め居る自由にして、意志其物の性質に就て心理上哲學上より或人の殊更らに主張する如き自由にあらざるなり。

元來自由意志論は道德上又は實際上の必要と事實とに由りて唱道されし者にして右の關係的自由を唱ふる者なれども其影響として勢ひ理論的又は絕對的自由論を生ずるに至れるなり。故に絕對的自由論は眞に實際上の必要に基く者にあらず。且又非自由説なるものも心理上哲學上より絕對自由論に反對する者にして、上述の關係的自由に反對する者にあらず。かくて自由論根本の本旨は非自由論の根

自由論の本旨と非自由論の本旨

本的所見と矛盾せず。兩者は元と別個の見地に立つ者にして、之れが互に反對の論鋒を交ゆるに至れるは蓋し誤想に由れるなり。

兎に角一種の自由説は非自由説と同一の見地に立て、心理上及び哲學上に於て意志の絕對自由を唱ふる者にして、自由説が自己本來の立脚地を出で、斯くの如き見解に至れる所以は主として誤想に由る。雖、また當初の非自由説に弱點ありしにも由るなり。當初の非自由説は宿命説及必至説にして、此等諸説の誤謬なるは否む可きにあらず。必至説は人の意志を以て外界の事物と直接に機械的關係を有する者となし、人の意志は外界事物より直接に且つ必至的に確定せらるゝ者なりとなすものにして、宿命説は人の行動は

必至説と宿命説

自由論の  
真理

總て其人ならぬ宿命てふ物の先天的に確定する處にして  
少しも個人の自由に依るものにあらずとなすなり。然るに  
外界の事情は意志を誘發する者なるも之を確定する者に  
あらず。之を確定する者は外界にあらずして内界に在るな  
り。吾人の意志は主もに吾人の内性に基く者。換言せば吾人  
の動機的心情及び之れが根底たる品性に基く者にして、其  
大部分に於て外界の事物より獨立せる者となす。即ち人の意  
志は其人自身が決する所にして其人以外の物が決定する  
者にあらず。故に必至説と宿命説は決して正當なる見解と  
なすべからず。自由説は即ち此誤に對して、人は各獨立の自  
由を有し自身に自己の意志を決定する者なるを主唱せり。  
人を外物に對して獨立となし、人の意志は重もに其人自身

絶對的自  
由論の非

の決する所となし、人の關係的自由を主唱して必至説及び  
宿命説の誤を正すに於て自由説は正當なり。雖、心理上及  
び哲學上意志が全く自由なる如く論するに至ては自由説  
は誤まれり。云はざるべからず。科學上より云へば意志は  
決して獨立なる者にあらず。心的現象としての意志は必ず  
心理法の支配に従ふ者にて他に基く處ある者なり。道德上  
杯に於ては人は自由なりとされ得べきも自然法下に人は  
自由なきなり。科學上より見れば人の意志は外物より機械  
的に確定せらるゝ者にあらずして、自己の品性動機其他種  
々の内心的事情に由りて確定せらるゝ者なり。となし、以て  
人の關係的自由をのみ許す確定説 (determinism)こそ眞を得  
たる者となす。然るを該説が尙ほ意志發動の基く所あるを認

むるが故に之を排斥し、意志の絶対自由を主張せんとする者は是れ絶対的自由論なり。關係的自由論は今や何人も首肯し得る所なるべきも、前者に至つては頗る困難の見解と云はざるべからず。以下哲學上及心理上より少しく之を論ぜん。意志の絶対自由を主張する者は曰ふ。吾人の意志は意志以外に基く所ありて生じ來る者にあらず。一の決意は其決意以外に然らざるを得ざる事情理由の存するありて止むを得ずして生じ來るにあらずして、吾人は其決意をなせしと同一事情の下にありて他の決意をもなし得るなり。若し意志が他の心的事情に基くものならんには、吾人は同一場合に於ては唯一決意の可能あるべき筈なれども、實際は然らず。吾人は同一場合に於て種々の決意をなし得るなり。即

絶対的自  
由論

其批評

ち吾人は或決意をなせし時に於て其決意をなさずして他の決意をなすを得たるなり。故に決意は全く自由に基ける者にて、他に原因若くは基礎を有する者にあらず。換言せば決意は他に基く所なくして自身に絶対的原始を有し、所謂「アンカンダシヨンド」の者なり。意志が他の事情に制せらるゝ如く見ゆるは其實夫れに制せらるるにあらずして、自身に之に適應するなり。即ち自己の自由によれる者なり。此議論たる事實の説明として頗る非科學的なるのみならず、哲學上斯の如き事は有り得べからざるなり。絶対的自由を各個人に許すは夥多の絶対獨立なる活動が世界に存在する事を許容する者なり。即ち世界は互に關係なき許多の絶対より成立する者となすものなり。人一人は絶対的に個

々別々にして、各々自己のみの世界を有し、他と關係するところなく、従つて他の存在を知らず、是れ極端なる多元論にして而して事實は決して斯の如き者にあらず。論者或は曰はん。人は各々絶對的存在にして本來他と關係せず。雖、其絶對的自由を以て他と關係する事を得るなり。是れ絶對的自由の絶對的自由たる所以にあらずや。是れ有り得べからざる全能力を人に附與する者にして、而かも之れ自由てふ事の必ずしも要求する處にあらざるなり。此處に、所謂、絶對自由とは、可能的なる兩者の孰れかを他より強制せらるゝなくして、自由に撰擇するに存する者にして、決して不可能なる事をなす者にあらず。併かし何を以て右を不可能の事となすか。蓋し本來全く關係なき處には如何にすとも關係

生じ得べからざればなり。一の關係は他の關係に基く者にて、全く關係なき兩絶待間には關係生ずべからず。極端なる多元論は極端なる一元論と同じく到底世界現象を説明し能はず。正當の形而上學説は兩者の中間なる雜多純一論にあり。是に於て、絶對は唯一ならざる可からず。絶對とは、自己のみにて全き者、自己以外に存在なき者の義なるが故に、多くの絶對てふ者義に於て既に矛盾なり。許多の絶對は、絶對にあらず。絶對の許多は許多にあらざるなり。左れば各個人に絶對性を附與せんとする絶對自由論は哲學上到底許容すべからざる者なる事明なり。人は事實に於て相對的依賴的の者にして、人の意志は夫れ以外に基く處なかるべからず。而して意志の直接的大基礎は人の内心若

くは内性にある者こそ、凡そ動機的事情に基かざる意志は實際存すべからず、又思惟さるべからず、意志は各人の品性及び心裏の事情に由りて確定せらるゝ者にて必然性を有する者なり。全く同一の場合には常に同一の意志發動する者なり。然れども心裏の事情は頗る微妙複雑にして全く同一の場合あるものにあらず。且つ意志の由て來る一切の事情を悉知するは人知の未だ及ばざる處なるを以て、理論上は意志は或心理的必然を有すべきも、實際につきて之を證明するは不可能の事に屬す。加之、時として由る所なくして一意志の生じ來るが如く見ゆる事も之れあるが故に、自由論なるものも唱道せらるゝなり。左れど此は眞に由る所なきにあらずして、之を認め得ざるなり。理由則や因果法は

正當なる  
意志自由  
説

普遍なるものにして、萬有一として由る所を有せざるはなし。意志豈只り然らざるを得んや。是を以て意志の絶對的自由は到底許容さるべからざるなり。然れども以上は是れ意志自由てう事を全く否定するものにあらずして、他の意味に於ては之を許容するものなり。蓋し意志の重もに基く處の動機及品性なる者は即ち人の自身なるが故に、人の意志は其人自身に基きて發するものにして、自身が自身を確定する者なればなり。是れ眞の自由獨立にあらずや。抑も自由とは自身に自身を確定する事なり。他に強制せられずして自身が自身を支配する事なり。全く自性に基きて行動し他の強制束縛を感ぜざる之を自由行動と云ふ。吾人の意志は即ち斯の如き者なり。故に之を自由

人の有し  
得べき眞  
自由

なる者となすを得べし。然れども此は意志が心理的必然に  
基くを否定する者に非ず。意志が心理的必然に従ふを否定  
し意志を以て全く據る所なき者となさんか。是れ絶対的自  
由なるべきも危険なる妄動を意志に許す者なり。人若し斯  
の如き意志を有せんか。人は各々他を信用すべからず。社會  
は一日も存在すべからざるのみならず、また人は自身をも  
信用すべからざるに至るなり。故に吾人の意志は或必然性  
を有し、大概豫め保證され、預測さるべき者ならざるべから  
ず。全能自在の神、雖自性の必然に従ふ者にして、或束縛  
の下にある者なり。然らざる者は是れ亂神なり。又決して存  
在し得べからず。左れば人の有し得べき自由は自性の必然  
に従ふて。然かも他的強制を感ぜざる所に存する者なり。又

人生幸福  
の秘義

た。全く自性の必然的束縛に従ふは少しも強制を感ぜざる  
ものにして、眞の自由行動なり。絶対的服従は即ち是れ自由  
なり。絶対的に服従して、其強制的法則を自己の主義となし、  
之を行ふを自己の喜びとなすに至らば、其法則は自然に束  
縛たらざるに至る。恰も意志發動を支配する法則が吾人自  
身のものなるが故に、少しも其束縛を感ぜずして、必然的意  
志が自由意志と見ゆるが如し。人の有し得る自由は只だ斯  
の如き者のみ。人は従ふに由るの外自由を得べからず。人は  
本來従ふべき者にて、己れを去り他に従ふに由て大なる自  
由幸福を得るに至るべく、始めより直ちに自由を得んと欲  
する者は却て之を失ふに至るなり。人生に於ける幸福の秘  
義また茲に聊か明かなるものあるなり。

意志ノ自  
由ニ關ス  
ル心識ノ  
自證

絶対自由論者尙ほ曰く。然れ雖吾人が絶対自由を有するは心識の直接自證する處なり。試に思へ吾人が一行爲をなす時、同時に此を爲さずして他を爲し得る者なるは何人も自識する處にあらずや。意志にして若し基く處ある者ならんには唯一意志の可能ある可き筈なれども、實際吾人は彼此孰れをも擇び行ふを得る事心自身が證明する所なるが故に、絶対自由の存在は許容され得べきなり。然るに該自由心識は必ずしも絶対自由を證明する者にあらずして、予輩の許容する如き自由を證明する者ともなし得るなり。何となれば該心識たる、吾人が目前二途を有する時自己の好む所に従ふて其孰れをも取り得る事を證明する者にして、而して斯の如き自由は是れ予輩の許容する所なればなり。吾

人は目前の二途につき其孰れをも撰擇し得る。雖、然かも只だ好む處に従ふて撰擇し得るのみ。好まざる處は之を撰むを得ず。而して自性の欲する處好む處に従ふて行動するは是れ予輩の許す自由にして、右の自由識は之を證明する者となし得べし。論者尙ほ曰はん。吾人は只だ自己の好む處に従ふのみにあらずして、好まざる處の事をも爲すにあらずや。然れ雖其の好に反したる行爲は其實全く好に反したる者にあらず。一の欲に反して更に遠大なる他の欲に従へる者なり。例へば或る遠大なる幸福の念若くは道德的理想感情等の爲めに下劣の欲念を放棄するが如し。何か願ひ念ふ處なくして決意は生じ來る者にあらず。或基本的情念に基かざる意志の存在は心理上許容すべからざるなり。



自由論者又曰く。決意は只だ心内の事情のみに由りて生じ  
來る者にあらず。一切の心念を超越せる自我、即ち自由撰擇  
者の局外に超在するありて、此れが諸動機中より其一を撰  
取せる者即ち決意なり。故に決意は此撰擇者即ち自我の自  
由に基く者にして、絶對自由の發動なり。決意を以て諸動機  
の自然的競争より機械的に出で來る者とし、最強の欲情若  
くは最も事情に適合せる動機が自身に他を排して意志に  
發する者となすは誤見なり。惟ふに超越撰擇者あるは事  
實なり。去れど此は必しも絶對自由の存在を證明する者に  
あらず。諸動機競争も亦事實にして、右の自由撰擇に由れる  
者は一面より之れを見れば諸動機競争に結果せる者なり  
とす。超越的撰擇作用と諸動機競争とは同一の事柄の兩側

面なり。何となれば右撰擇者たる超越的自我は諸心念の外  
に獨自一個の存在を有つ者とはこれ舊時の誤想にして今  
日斯の如き見を主張する者なし。超越的自我は諸心念と別  
個のものならずして之と同一の者即ち凡ゆる諸心念の全  
體に存する者なるが故に。該自我の自由活動は諸心念より  
獨立せる意味のものにあらずして諸心念の必然的活動と  
同一ならざるべからず。即ち之れ諸心念の活動より成れる  
者にて該活動の總體に外ならず。諸心念の競争により自然  
的に確定せらるゝ決意は、個々の心念より之を見れば諸心  
念の具合より心理的に止むを得ずして生じ來る者なれど  
も、心識全體より之を云はゞ此は心が自身に爲せる自由行  
動なるが故に、此れ超越自我の自由撰擇ならざるべからず。

自我は諸心念の全體なるが故に諸心念の活動は何れも自我の活動なり。諸心念は其各個につきて之を見る時は何れも皆心理法に従ふ必然作用にして各々他に基く所ある者なれども、心全體たる自我の働作として之を見る時は此れ自我が自身を確定せるものにして、即ち自由の働作なり。故に必然的見解は個々心念につきて心の現象を究め、其性質起原關係等を吟味する心理學者の必ず懷抱する所にして、自由の見解は道德上、宗教上、其他諸種の實際的觀察點より人を見從つて一個全體の人格として人心を觀察する時に於て自然に採用せらるる者なりとす。個々の心念には自由なきも全體としての人に自由あるなり。是れ人の活動は主もに其人の自性に基く者にして、即ち自身が自身を確定す

る者なれども、各個心念は何れも其心念以外の事情に基き來れる者なるに由るなり。

## 第三編 認識論

### 第一章 認識概論

認識には識る者と識らるゝ者と異なる可からず。萬有は既に論じたる如く實在に於て維多なる者にして、認識は即ち其一實在が他實在を識る者なり。抑も万有の實在は維多なり。雖其維多は根底に於て同一なる者にして全く個別なるにあらず。全く個別なれば其間何の關係なく何の影響あるを得ず。従つて一が他を知るてう事も有り得ず。雖諸實在には根底的の同一あるが故に之に基きて其間種々の關係あり影響あるをうるなり。認識は即ち該關係の一にして、一實在が他實在の影響を感得し一種の働作によりて他實

認識は總て關係的なり

在を認知せんとする者なり。

然れ雖吾人が他物を知るは其物自身を知るにあらずして、其れと他物との關係を認知する者なり。即ち他物との關係に於て其物を認むる者にして絕對に其物を認むるにあらず。故に吾人は一物をのみ知る能はず。純一の識は無識に等し。必ずや二個以上の物ありて、一に對して他を知り他と異なる點に於て一を知るに由りて知識なる者あるを得るなり。認識は總て比較關係の作用にして、吾人の知識は總て比較又は關係の知識なり。是れ吾人が知識の根本的性質にして、人は到底物自身(即ち實在の儘)を知る能はず。此點に於て人の認識能力に制限あるは認めざる可からざるなり。認識なる者は只だ比較的に物を認識する者にして、根本的

に云へば只だ諸物間の差別と同一とを認識するものなるが故に。認識作用は大別して差別的認識作用と同一的認識作用の二つとなすを得べし。前者は即ち感覺にして後者は即ち知覺概念等感覺以上の認識なり。感覺は外界の差別を直接に感得し。知覺概念等は感覺の與ふる所を基礎とし之に或心作用を施して或實在的同一を認得する者なり。而して其心作用は類同作用アノシ、レシ、コシ、概括作用、推論斷定の作用等種々あり。雖、本質は總て同一にして一種の合一作用なり。即ち異者の間に或同一を發見して該異者を其同一の點に於て合アインツ同せんとする合同作用に外ならず。予は之れを(廣義の)理性作用と曰ふ。惟ふに物の同一を認識するは感覺以外(知覺以上の)認識作用の一般的特性なり。試に思へ。昨日見し此机と

今日見る此机とは異なる時に於て存する別個感覺なるに拘はらず、吾人は之を同一物となす。かくの如く俱在的若くば繼續的なる別感覺の上に或同一性の存するを認め、以て數多感覺を種々に結合し行くもの之れ知覺作用にあらずや。概括、推論等に於ては此作用更に顯著なりとす。分解は綜合の爲めに生ずるものにて綜合の他側面なるが故に一切の知識作用は總て是れ異者の間に同一を發見して之を認識的に合一するにあらざるは無し。只だ認めらるゝ同一の多少に應じ合一せらるゝ程度に差違あるのみ。全然相同しき兩者は之を同一物とするも異點尙ほ多き者は之を同性質の別物となすなり。類同作用アノシ、レシ、コシの如き概括作用の如きは形式上不充分なる合一作用にして斷定及推論に至つては最

發達せる形式に於ける合同作用なり。蓋し斷定の「なり」は「同じ」の義にして、推論は中辭の媒介に由りて兩辭を明白に合同するものなればなり。

認識作用の性質以上論するが如し。次に之れが對境たる實在との關係を考ふるに、感覺は既に言へる如く物の差別を認識するものにして、而して實在に差別性ある事は前に論したる如くなるが故に、感覺は雜多實在の直接影響に基きて生じ實在の差別面を感知する者となしうべし。然るに實在は差別面と共に無差別面を有し、雜多なると同時に純一なるが故に、其差別面をのみ感知せる感覺は決して物の完全なる知識たる可からず。茲に於て吾人は更に感覺を補ひ實在の差別面と共に無差別面をも感知せしむる者を有せ

認識と實在

知性作用の目的

ざる可からず。是れ即ち理性作用なり。理性作用は吾人の感覺する差別的現象の間に其裏面なる同一性を發見し差別的現象を認識的に合同する者なるは已でに之を言へり。吾人が物の實相を知るは斯くの如く、感覺作用と理性作用の補助的共働に由る者にして、感覺のみに由りては物の真相を知る可からず。又た理性のみにては知識は全く生じ來らず。感覺作用によりて實在の差別を知り、理性作用によりて其無差別を認め、以て差別にして無差別なる實在の真相を認得せんとする之れ、知性作用の目的なり。知性は斯くの如くして實在の真相を認得せんとする者なり。雖固より完全の認得は得らる可きにあらず。吾人の認識能力に制限ありて、吾人は只だ物の關係を知り得るのみにて物自身を知

るを得ず、即ち物の本體を其儘に直識するを得ざるは己でに言へる如くなるを以て、吾人の知性は只だ物の實在的又は本性的關係を知るを目的とする者なり。蓋し吾人の知性作用は實際的生活の爲めに存し、實際生活に必要な知識を得るを目的とする者にして、而して實際生活に必要なは只だ物の關係の知識なればなり。然れども吾人は物の實在的關係即ち深奥なる關係を知らざる可からず。之れ實際生活上必要の事にして、知性作用の目的なり。

論者或は曰はん、物の本體を認めずして關係を認むるは論理上不可能の事にあらずや。關係の認識は無論本體に基く。雖、心識に上り來るは只だ關係の認識のみにして、該認識の根本作用は無識的のものなりとす。然れ雖、また物の本

體は全く認む可からずと、超越實在の存在すらも否定すべし。となすは非なり。吾人は唯だ物の本體を直觀し、又は絶對的に其れを認識し得べからざるのみにて、全く其れにつきて知識しうべからざるにあらず。其れと他との關係を知るは即ち其物につきて多少知れるものなるが故に、關係的に物自身を知るは出來得可き事なりとす。

## 第二章 感覺論

感覺は只だ物の差別を認識する者にして、而して該認識の正確なる所以は之れが直接外物の影響に基き、吾人の心内にあつて外物を其儘に代表するに由る者とす。吾人の心性は純一なるが故に、雜多なる感覺は心外に基く所なかるべ

からず。即ち心外に雑多なるものありて心が之を覺得せる者ならざるべからず。故に感覺が外物に關する眞正の認識たるは否む可からざるものとす。然れ雖認識は本來關係的に物を認むるものにして物自身を認むる能はざるが故に、感覺も亦た物の差別をのみ認識する者なるは勿論、其の差別を認むるに於ても悉く實在の儘を認むるにはあらず。蓋し認識は心の働にして外物に基くこと共にまた心の性質に基く者なればなり。吾人は感覺に於て外物を認識するも、こは心の性質に従ふて之を認識するが故に、知識の形式に主觀的要素即ち非實在的要素の加はるは免る可からず。予輩を以て之を見れば、感覺が實在を誠實に認識せる處は、只だ、純粹の差別的認識にのみありて、其差別の表明さるゝ状態

感覺に於ける誠實の認識

（即ち差別の様式）は虚妄のものなりとす。即ち色相、形状、硬度、溫度等の如き所謂物質的屬性はこれ主觀的事情の爲めに生じたる幻影にして、只だ是に由て表はさるゝ差別的關係（差別的状態にあらず）のみ誠實に實在を認識せる者なりとす。

感覺は斯くの如く只だ外的實在の差異に關する或認識を得る者にして此點に於て之れが正確の認識なる事は疑ふ可からず。次に予輩は此差別的認識を基礎として外的實在の同一性を認識せんとする理性作用の價値を攻究せんが爲めに、先づ次章に於て其理性作用の性質を精査すべし。

### 第三章 理性論

理性作用の性質については第一章に於て既に説述せる處あり。雖本章に於て尙ほ之を詳論し。次章に於て該作用より結果する認識が必ず事實と符合する所以を説明せん。欲す。理性作用の合一作用なるは既に之を言へり。而して此合一作用たるや一種の原則に基きて物を合一する者にして。此原則を明かにせざれば未だ理性作用の性質を明かにせる者と云ふべからず。

凡そ理性の認識作用即ち一般の思念的(即ち知覺以上ノ)認識作用の性質を考ふるに。該認識作用たるや、別個物の状相互に相同じき點は其存在に於ても同一にして別個ならずとなす者なり。故に兩者の状相全然相同じければ兩物は全然同一の存在を有する者にして別個物にあらずとなすなり。然れ雖

理性作用  
の本性

若し状相全然同様なるにあらずして若干の差點あり到底同一物となし得べからざる者は、状相に於けると同一程度の同一が其存在に存ずとなすが故に、之を同性質の別物となし又は降つて同種類の者となす。蓋し質の同一は存在の同一の少なき者なればなり。例へば人を知るてふ事は今見る所の人を曾て見し人と同人となす事なるが、其之を同人となすは只だ兩者表面的状相の同じきに由り兩者別個の感覺たるに拘らず之を同一人となす者なり。又吾人が物を知るは一物が已知の或物と状相の大に相同じきが故に其性質に於ても同一なりとなす者なり。斯くの如く表面的状相の同一を存在に迄及ぼすに由りて、或は之を同物とし又は同質の物となし同種の者となし、或は又少しく性質の似



たる者となす。即ち状態に少しにても同一の點あれば必ず之に應ずる存在的又は内質的同一あるを認む。是れ感覺以外に於ける一切認識の性質なりとす。由是觀是。理性の合一作用は單に實際同一なる點に於て兩者を同一となす者即ち現存する同一の直覺的認識のみに非ずして、其同一の故に由りて一層深奥なる他の點に於て兩者を同一となす者たるなり。現在の同一のみの認識は之れ只だ一步進む爲めの階段にして、之に由て一層深奥なる事實を認識するにあらざれば吾人の知識は實用的となる能はざるなり。予は假りに之を積極的認識と名づく。理性作用の目的は積極的認識にあり、従つて該作用の全體的性質は積極的合一作用なるが故に。予輩は以下只だ積極的合一作用のみを講究すれ

ば可なりとす。

理性作用(以下單に思想とも云ふ)の一般的本性上述の如き合一作用なりとせば、思想の本性は根底に於て左の原則を有する者にて、思想は即ち此一般原則を特殊の場合に應用する者と見て可なるなり。其原則とは即ち、

「状態の同一は存在の同一を伴ふ。」

又は、

「兩者(又數者)の状態同じき點は其存在に於ても同一なり」等の斷定に含蓄せらるゝ者にして、性質上差異なき者は絶對的に同一なり。てう古語も亦た右の原則を言述せる者となすを得べし。吾人の思想は根底に右の如き一種の斷定を有する者なるが故に、右の斷定にして誤れる者即ち客觀の

理性の根本的原則

事實に符合せざる者ならんには理性的認識は悉く認謬ならざる可からず。予は右の原則を假りに思想の根本的假定原則又は思想の潜有的根本断定と名づく。

以上は一種高等なる認識作用に於て明視せられうる者なり。雖、而かも此れ思想の根本的性質にして總ての思想作用の本質ならざる可からず。蓋し思想は其如何なる局部にも全體あり。局部に行はるゝ者は即ち全體に行はるゝ者にて、全體は只だ局部を大にし復雜にせるものなるが故に、全體の性質却つて局部に於て視られ易き者あり。極單純なる知覺作用も復雜極まれる推理作用も其手續狀體に於てこそ單復の差あれ。實質は同一の思想作用にして、一切の思想作用は何れも上述の如き者なりとす。

感覺以外一切の必然的認識は總て右の思想作用に基づくが故に、該認識の眞實なる可き所以を説明せん欲せば此思想作用の必然に結果する認識が必ず事實と符合すべき所以を説明せざる可からず。就ては先づ上述の根本的假定原則が事實に對して直實なる所以を説示せざるべからず。是れ皆な次章に於て試みんと欲する處にして、此處には只だ一切の必然的認識は同じく上述の思想作用に基づく者なるを明かにし置かんと欲す。然るに理性の必然的認識には別種の思想作用に基き、其れが確實なる所以につきても特殊の説明を要するものありとす。學者なきにあらず。カントの如き是なり。彼曰く、吾人の断定には賓詞の意義が既に主詞中に含有され居る者と然らざる者とあり。例へば「三角

カントの  
断定論

分解断定  
と総合断定

形は三個の角を有す」と云へば、之れ三角形てう主詞の中に已でに含蓄され居る事を更に賓詞に於て言へる者なり。然れ雖「此物は重し」と云へば「此物」てう概念中には少しも「重し」てう意義を含み居らざるなり。前者を分解断定と曰ひ、後者を総合断定と云ふ。兩者別種の思想作用に基く者にして其眞實なる所以を證明するにも兩者別種の方法に由らざる可からず。即ち前者は概念に由り、後者は經驗に由らざる可からず。且又、総合断定の中にも一般的総合断定と特殊的総合断定とあり。特殊的総合断定は經驗を其儘に言明する者なれども、一般的総合断定は例へば「總ての物は重し」又は「總ての花は散る」と云ふが如く、總ての物又は總ての花につきて断定し、吾人經驗の及ばざる處迄言明するが故に、是れ又

「純粹理性  
の批判的  
目的」

た特殊の思想作用に由らざる可からず。従つて之が證明の方法も異ならざる可からず。尙ほ又た、特殊的総合断定の中にも「甲は乙の原因なり」の如き因果的断定の如きは經驗のみに由りて來り得る者にあらず。斯くの如く分解的知識あり、総合的知識あり、総合的知識の中に經驗にのみ基けるあり、經驗のみより得べからざるあり。又經驗のみより來らざる者の内因果的断定と一般的断定とは別の思想作用より來らざる可からず。而して是れ等皆な證明の方法を異にせざるべからず。而して經驗のみより來り得べからざる総合的認識を説明せんが爲め彼れの有名なる「純粹理性批判」は出で來りしなり。

然るに右の所謂分解断定なる者はこれ予の前きに謂へる

所の消極的認識なるが故に之を無視し専ら綜合的認識につきて考ふるに。此れ予が前きに積極的認識と曰へる者にして。カントは之れに經驗のみによりて得らるゝ者と經驗のみにて得べからざる者とこの二種あるが如く云へども。予輩を以て之を見れば。凡そ此種の知識にして單に經驗のみに由りて得らるべき者はある可からず。例へば上述の「此物は重し」てう認識について之を見るも。其「重し」てう吾人の經驗が特に其物の性質に基けるものなる事。即ち其重量の經驗と其物體との關係は是れ決して經驗さる可き者にあらず。又「此樹は櫻樹なり」てう特殊經驗的認識について考ふるも。此れ其見る所の樹が外部的狀相に於て他の櫻樹に類似せる故を以て見へざる内部的性質に於ても其れと同一な

綜合的認識  
は何れも  
經驗より  
來らざる

りとなせる者にして。決して直覺されし事實をのみ認識せる者にあらざるなり。「此の人は吾が曾て見し人なり」てう如き認識に於ても同一なり。今見る人と曾て見し人とは吾人に於ける別個の經驗にして別物なり。故に之を同人となすは經驗上の事實のみを認めたる者にあらず。斯くの如く吾人の綜合的認識は如何なる者と雖皆な經驗のみに由りて來らず。一種の主觀作用に基ける者にして。何れの綜合斷定も一般的綜合斷定及因果的斷定と同一なりとす。且又カントは其主觀作用に十二種の差別を認めたりと雖。予輩を以て之を見れば總て是れ根底に於て同一作用にして。其性質は予が上に説述せる如き者たるなり。予は以下の本章に於て一般的綜合斷定と因果的斷定とが矢張り予が所説の思

一般的綜合  
斷定の  
本質

想作用より生じ来る者なるを明かにするに共に、カントが認めたる十二種 of 思想作用が其實總て同一の思想作用にして且つ予が所説の思想作用なるを明かにせんと欲す。先づ一般的綜合斷定の基礎たる思想作用について考ふるに、該作用の本性は既知より未知を推し、特殊知識より一般的認識を得る者即ち所謂歸納作用にして、之れが一種の積極的合一作用たるは明なりとす。何となれば已知の事物より或未知物を判斷するは之れ其未知物を已知物と或點に於て同一となす者にして、而して其の之を同一となすは他の點に於ける兩者の同一に基づけばなり。例へば曾て經驗せし所の物體皆な重かりしを以て他の物體も皆な同じく重からざるべからずとなすは、物體てふ點に於て從來經驗

せし物に同じき者は該同一の故に由り他の「重し」てふ點に於ても其れと同一なりとなすものなり。故に是れ同一状態を有する別物を内質に於ても同一となし、一物に就きて然る事は或他の點に於て之と同様なる他物につきても然る者なりとなす思想の根本的傾向に由れる者にして、即ち上述の根本假定原則に由れる合一作用ならざる可からず。從來多數の學者は一般的斷定を生ずる思想作用を以て「自然界の齊一」てふ假定に由れる者となせり。然れ雖上述の根本原則は自然界齊一の原則よりも根本的なるが故に、自然界齊一の假定にのみ由る思想作用は一般的斷定を得るに用ひられうるのみにて他に適用すべからざれ雖。上述の根本假定原則に由れる者は只だに一般的斷定のみならず固果

的認識及び其他一切の特殊認識を説明し得るなり。故に思想の根本原則は予の前きに説述せるが如き者にして、自然齊一は該原則の一含蓄、若くは特殊方面に於ける其の派生原則なりとすを得べし。特殊斷定を生ずる思想作用(特殊的思想作用)も一般的思想作用と同じく上述の根本的假定に據れる合一作用なる事以上の講究に由りて明なりと雖、只だ一般的思想作用にあつては、特殊的思想作用が二個の物或點に於て相同じきを見て直ちに他の點に於ても兩者また同一なりと推斷するに反して、已知物に於ける其兩點の必然的連結を確かむる爲めに經驗を反覆して所謂歸納法を全ふするに於て特殊的思想作用と異なる處あるのみ。次に因果的認識を生ずる思想作用を講究せん。該認識の

因果的斷  
定の本源

生じ來る所以を説明する者に種々あり。ヒュームの説は既に記述せる如くにして之を心の習慣に基づくとなす者なり。同一の場合に於て乙なる事物が常に甲の事物に繼續し來るを見る時は茲に心の習慣を生じて、同一場合の甲を見れば必ず乙の出で來るを想ふに至る。斯くて甲乙兩者の間に必然的繼續の關係を認むる者之れ因果的認識なり。然るに因果的認識の本質は必然的關係の認識にあらざるが故にヒュームの説は該認識を説明し能はざるものごとす。次にカントは曰く因果的認識の生ずる所以は吾人の思想が物の關係を因果的に思考する性質を先天より有するに由る者なり。因果的考察が思想の先天的性質に基づく者なりとするは予輩亦た其可なるを認む。雖思想が物を因果

的に考ふる特殊性質を先天的に有すこなすに於ては、予輩は之に賛同する能はざるなり。何こなれば斯の如くなす時は、只に因果のみならず其他種々なる思想形式を以て各々特殊の基礎を思想の先天的本性に有する者こなし、以て思想の先天的本性を頗る複雑なる者こなさざるを得ざればなり。カントは思想の先天的形式を十二こなし、思想の本性は十二の先天的範疇を有する者こなせり、然るに科學的説明は成る可く單純なる者を以て複雑なる者を説明し得るを可こす。故に若し思想の先天的性質を成るべく單純なる者こなし、而かもよく總ての認識現象を説明し得るに於ては之れ最良の説明なり。こ云はざるべからず。予輩を以て之を見るに、吾人の思想作用は更に單純なる先天的性質を

以て説明され得べきなり。予輩は認識現象の説明上、因果及び其他の思想形式を各々特別なる先天的基礎に基かしむべき必要を見ず。思想の先天的性質は之を單一なる者こなし、經驗的思想の諸種の性質は各自先天的の者ならずして、一の先天的性質が經驗界の事情に應じて種々に發現せる者こなし。思想の雜多範疇は凡て後天的起源の者なり。こするに於て何の不可なる所あるを見ざるなり。只に認識起源の説明上不可なきのみならず、思想と外界の調和を説明する上に於ても亦之を不可こなすべき理由なし。思想と外界の調和ある所以はカントの如く思想の形式的原理をして直ちに外界の形式的原理たらしめざれば説明さるべからざる者に非ず。且つ假令此必要ありこするも其形式的原理

が雑多ならざるべからざる理由なければなり。既に僅々十二の先天的範疇に由りて思想及び外界に於ける無数の事物を説明し得べしとなす者、何ぞ更に一步を進めて一の先天的範疇に由りて一切を説明し得べからざるとなすべき理あらんや。

カントの十二範疇

カントは断定に於ける思想の元素的職能として十二種の思想作用を列舉し、且つ其十二職能に於て思想の根本形式十二を看得し。此十二形式を以て思想の先天的に有する所の者、即ち思想の先天的範疇となせり。十二の職能と範疇は左の如し。

十二職能

〔單稱的〕

〔肯定的〕

- (一) 分量的 特稱的 (二) 性質的 否定的
- 全稱的 無限的 (又 制限的)
- 合式的 未決的
- (三) 關係的 假設的 (四) 樣程的 確定的
- 離接的 必定的

十二範疇

- (一) 分量範疇 單一 數多
- 總體 實有
- (二) 性質範疇 非有 制限
- (三) 關係範疇 本質 因果 交互
- (四) 樣程範疇 可能 現實 必然



然るに此等十二の諸範疇は性質上總て同一の根本範疇に歸し得べきなり。試に見よ、四種十二個の中第三種關係範疇は思想の本體に存し思想作用の特質を表はすが故に最重要の範疇なるが、此等三個の範疇に於ける思想作用は何れも合一作用なるにあらずや。何となれば、本質と屬性の關係と「原因と結果との關係」は同じく依賴的關係にして、而して依賴は或種の同一を意味する者なるが故に、「本質的考察及び因果的考察は即ち或種の同一を兩者の間に認め以て兩者を合一する者なればなり。」交互は「因果」の重覆なるが故に其實因果と同一なり。他三種の範疇と雖總て其思想的職能に一種の合一作用を認むべき者なり。乞ふ之を證明せん。先づ第一種分量的思想作用を考察せんに、單稱的思想作用

は只だ他の二者のあるに由りて茲に存置さるゝ者にして、其實此は特殊の分量的思想作用と叫ばるべき者に非ず。而して特稱的思想作用と全稱的思想作用は共に是れ一種の概括作用にして概括作用は一種の合一作用なるが故に、分量的思想作用は凡て合一作用なりとなすを得べし。

第二種性質的職能に於ける思想作用を考ふるも、肯定は一を他と同一となす者にして明白なる合一なり。否定は肯定の反面なる故に否定作用は反面的肯定作用なりと言ふを得べし。無限的思想作用は論理的、外延の無限的にして内容の制限的なる所謂無限的斷定(例へば「靈魂は不死物なり」てふ如き)を生ずる思想作用なり。即ち是れ消極的肯定作用にして肯定と否定の兩要素より成立する者なるが故に、此れ

亦た複雑なる一種の合一作用ならざるべからず。第三種即ち關係的思想作用につきては、合式的作用は只だ主詞實詞たる二個の概念を合一する者なるが故に明がなる合一作用なり。假設的思想作用は一斷定を他斷定の上に依頼せしめ、兩者を或點に於て同一となすが故に、是れ亦一種の合一作用とす。離接的作用は表面に於ては一種特別の作用なるが如きも、其實此れ假設的作用と本質を同ふせる者なり。例へば「世界は盲目的偶然が、内部的必然か、若くは外部的原因かの孰れかに由て存する者なり」とふ離接命題は「世界は盲目的偶然と内部的必然の孰れにも由るに非ざれば、外部的原因に由りて存する者なり」若くは「世界は盲目的偶然に由りて存せざれば、内部的必然か若くは外部的原因の孰れか

に由りて存せざるべからず」等の如き假設命題と同一なるに由りて知るべし。離接命題は假設命題の複雑なる者にして、假設的形式に合式的形式を加ふれば特殊なる離接的形式を生ずるなり、則ち特殊形式に於ける離接作用は合式作用と假設的作用の結果なるが故に、矢張り是れ一種複雑なる合一作用ならざるべからず。第四種的作用も亦同じ、未決的作用は合一作用の不完全なる者にして、確定的作用は其完全なる者、必然的作用は他の合一作用に依りて強制せられたる（即ち内部的強制に基ける）合一作用にして、一種の二重的合一作用なり。

斯の如く思想作用は如何なる形式に於けるものと雖其本質は同じく合一作用にして、思想の根本的職能は合一にあ

りと謂ふを得べし。四種十二個の範疇は該合一作用の特殊形式にして即ち或特殊場合に於ける合一の仕方なりとす。然るに仕方の如何は合一さるゝ物の如何に依りて存する者にて合一する者が始より或仕方を限り有するに非ざるが故に、カントの十二範疇は經驗界の事情に基きて生じ來る者即ち後天的起源の者にて思想が先天的に有する者に非ず。思想の先天的性質は只だ之が合一作用たるに存す。而かも或特殊形式に於ける合一作用にあらずして一般的合一作用なり。特殊方式に於ける合一作用は特殊の經驗的事物に應用されたる者にして、其特殊方式は經驗界の事情に基づく者とす。故に思想の先天的範疇なる者を強いて言はんこせば、此れ一般合一作用の有すべき者なるが故に、乃ち

思想の根本的範疇

「同一」の一範疇となさざるべからず。思想の本性は只だ物を「同一」的に考ふるの職能を有する者なればなり。之を要するにカントは思想の元素的職能を十二ありとなし。而して悉く之を思想の先天的に有するものとなせり。故に十二形式は凡て思想の先天的形式となり、思想の先天的性質極めて複雑なる者となれるも、予輩は其十二職能の外に「合一的」てう一般的職能を認め、且つ十二職能は總て該合一的職能の一種たるを認むるが故に、「合一的」たる一般職能を根本的の者となして十二職能を経験的に派生せる者となし、同時に右一般職能の形式即ち「同一」を以て思想の根本的範疇となすなり。斯の如く思想の本質を單純なる者となすはまた科學的説明法の原則に合ふ者と云ふべきなり。

思想の根本的標準は客觀的事實に於ける種々の形式を説明し得るのみならず、亦た思想内容上の法則をも説明し得るなり。内容上の法則とは何ぞ。即ち思想上真理の原則なり。蓋し思想上真理、即ち主觀的真理の標準は思想の自身に存せざるべからず。何となれば主觀的真理は思想が自から之を真理となす者なるが故に、之を真理となす所以の標準は客觀的事物に存せずして思想自身の内に存せざるべからざればなり。客觀的真理は思想と客觀事物との符合に存するが故に、其標準客觀事實に存すれども、主觀的真理は客觀事實に關係せざるが故に、其標準は思想の原則に存せざるべからず。而して主觀的真理の標準たる思想の原則として從來認め

斯の如く思想の先天的範疇を唯一なる「同一」の範疇にありとなす時は、經驗的思想に於ける種々の形式を説明し得るのみならず、亦た思想内容上の法則をも説明し得るなり。内容上の法則とは何ぞ。即ち思想上真理の原則なり。蓋し思想上真理、即ち主觀的真理の標準は思想の自身に存せざるべからず。何となれば主觀的真理は思想が自から之を真理となす者なるが故に、之を真理となす所以の標準は客觀的事物に存せずして思想自身の内に存せざるべからざればなり。客觀的真理は思想と客觀事物との符合に存するが故に、其標準客觀事實に存すれども、主觀的真理は客觀事實に關係せざるが故に、其標準は思想の原則に存せざるべからず。而して主觀的真理の標準たる思想の原則として從來認め

らるゝ者左の如し。

(一)同一法。—在る者は在り。(例へば梅花は梅花なりと云ふが如し)。

(二)矛盾法。—在る者は同時に又在らざる者たるを得ず。

(例へば梅花と梅花ならざる者は同物に非ずと云ふが如し)。

(三)排中法。—事物は在か不在か孰れか其一たるべし。

(例へば馬は栗毛か非栗毛かの一たるべしと云ふが如し)。  
以上之を思想の三原則又は根本的法則と云ふ。此等三者は吾人の思想に於ける最も明なる真理にして、所謂自明的真理の根本的なる者なり。吾人の思想は正當の思想たらんが爲めには必ず斯の如くに考へ行くべき者にて、斯の如くに考

自明的真理の根本

へざる者若くは根本に於て斯の如き考へに合せざる思想は正當の思想ならず故に此を根本的思考法となすべく、又思想の原則と云ふべきなり然るに該原則が斯の如く思想上の根本的眞理たる所以如何何故該原則が斯の如くに思想の原則たるか此理由は蓋し思想自身の性質に存せざるべからず而して此れ思想の本質が合一作用にして思想の先天的範疇が「同一」範疇にあるに由るとなす時は其説明至つて容易なりとす何となれば矛盾法は同一法より得らるゝ者にて同一法の反面なり而して排中法は同一法と矛盾法の合併より生ずる者なるが故に同一法は三者中最根本的の者なりとせざるべからず而して「在る者」は「在る者なり」と同一法は是れ完全に「同一」の範疇に適合せる思想作用

なればなり主觀的眞理の標準は主觀の根本範疇に存せざるべからず而して「梅花は梅花なり」等の如き命題は只だ是れ「同一」の範疇に内容を與へたる者たるに過ぎざるなり斯の如く思想原則が思想原則たる所以主觀的眞理が主觀的眞理たる所以の理亦た思想の本質が合一作用たるに由て説明され得べき者なりとす。

「同一」を以て思想の唯一根本的範疇となす時は只だに眞の眞たる所以を説明し得るのみならずしてまた善の善たる所以、美の美たる所以をも説明し得るなり換言せば理性の唯一根本範疇たる「同一」は主觀的眞理の基礎たるのみにあらずしてまた善又は美とて如き主觀的感念の基礎たるなり何を以て之を言ふ試みに善の最完全なる者となさる

思想の根  
本範疇は  
また善は  
美の標準  
なり

「己れの欲する處之を人に施す又は己を愛する如く人を愛す」てう事に就いて之を考ふるに。此等命題の意義は、他人も自己と同じく人たるが故に、自己を重んずると同じく他人をも重んぜんとするに存するものにして、即ち、之れ「花を、花と同じく言ふに等しく、花は花なり」を「實行的に變じたる者也」後（花は花なり）は同じ者を認識的に合同せる者にて、眞理は之に存し、前者（花を花）は同じ者を實行的に合同するものにて、善は此處に存す、兩者共に同じ者を合同する者にして、理性の根本範疇に適合せる合同作用たるは一なり、美も善と同じく事物の合一に存する者にして、内質上の正當合一に存する者は善形式上の同種合一に存する者は美なり、故に善は内質上の美、美は形式上の善なりと云ふを得べし。

## 因果的認識の本質

蓋し理性の合一作用には二種あり。一は純粹に認識的のものにして、一は實行的のものなり。而して後者作用は吾人の行爲上に表はるるものにして、之れ次編人生論の研究に屬するものなり。

思想の根本範疇以上論する如しとせば、物を因果的に考ふる性質はカントの言へる如く思想が先天的に有する者にあらずして、思想の先天的に有する處は只だ物を同一的に考ふる性質のみとせざる可からず、固より因果的思考は同一的思考の一種なるが故に、先天的思考作用の中に含有され居る者となし得れども、因果的思考てう特殊なる思考の形式が先天的にありとす可からず、因果的思考は同一的思考の特殊なる形にして、經驗的に生じ來る者なり。而して

之が如何にして生じ來るか、既に論じたる處に由り明なるべし。雖、要するに之れ先づ原因結果兩者の間に或表面的同一を認め、該同一の故に由りて更に其存在に於ける同一を認むるに由る者にて、即ち上述の積極的合一作用に由る者す。難ずる者或は曰はん。然るに空間的又は時間的位置を異にして且其狀相をも全く異にして、其間何等の同一をも認むべからざる兩者の間に因果的關係を認むる事あり。斯くの如きは是れ思想が存在の同一を惟知する前、先づ何等の同一をも直覺せる者にあらず。故に狀相の同一より内部的同一を推知せる者に非るなり。推ふに位置狀體を全く異にせる兩者の間に因果的關係を認むるに至る理由は其れと同じ兩物の間に本體的同一を認むる際に於

ける者と同一なり。吾人は位置狀體の全く異なる二物が本體に於て同一なるを認め、若くは之れが同一個體の異部分なるを認むる事あり。而してその之を認むる所以は兩者の運動が一樣にして其運動に同一なる者あるが故なり。同一の本體を有する兩者若くは同一物の異部分は何れも其本體と共に動くが故に必ず同一の運動をなす。吾人の思想は其運動の狀體に同一なる者あるを直覺し之に由て他の深き同一を推斷するなり。因果的關係の認識も亦た斯くの如くして得らるゝ事あり。蓋し因果的事件は全體に於て一個の事件にして、原因と結果は一事件の兩端若くは異部分なるが故に、因果的認識作用は右の認識作用と殆ど同一なるを得べければなり。但し原因物と結果物との間には、因果的

關係が空間的形式に於てのみ現はるゝ所(即ち基礎と依頼物)に於ての外、運動の一樣てう事も存せず、只だ「運動の一樣の一種とも見る可き」生滅の一樣あるのみとす。生滅の一樣とは何や。原因滅すれば結果も滅し、一方生ずれば一方また生じ、かくて兩者の生滅に一樣なる者あるを云ふなり。吾人は此一様の故に由りて兩者間に或存在の同一を認む、而かも同一本體を認むる時の如くに完全なる存在の同一を認めざるなり。是れ最初に認むる直覺的同一が因果的關係の場合に於ては重もに生滅の一樣てう事にありて、他の場合に於ける者よりも不完全なるに由る者とす。換言せば、原因と結果との間には直覺的同一の存する至て少きが故に、内部的存在の同一を認むる事も亦た不完全なり。因果的關

係の認識は即ち此不完全なる同一的認識にある者にして更に完全なる同一的認識は同一個性の認識となるなり。以上論ずる如く一般的斷定、因果的認識、及其他一切の綜合認識は總て同一の思想作用より生じ來る者にして、而して其思想作用は之れ上述の根本原則に基ける合一作用なりとす。

#### 第四章 思想と存在との關係

思想作用の性質前章論ずる所の如しとせば、該思想作用より必然的に生じ來る客觀的知識が必ず客觀事實と符合する所以を説明せんが爲めには、先づ思想の根本的假定原則又は潜在的根柢斷定が客觀の事實と符合する者なる事を



明にせざる可からず。何となれば吾人が一切の知識は該斷定より演繹せられたるに等しく、吾人の思想作用は該斷定を大前提となせる演繹作用の如くなればなり。固より該斷定は吾人之を有識的に有するにあらず。故に思想作用は明かなる演繹作用にあらずして只だ狀相同じき者を存在に於ても合一し行くのみなり。雖其成果たる知識の價值が該根本斷定の知識的價值に依頼する事は前者が後者より明かに演繹されし場合と異なるなし。故に思想の必然に基ける吾人の客觀的認識が必ず事實と符合するものなる以上、思想の根本的潜有斷定は必ず一般事實を代表する者なる可く、該斷定が事實と符合する以上、思想の必然的認識は總て事實と符合せざる可からざるなり。故に予輩は先づ客

## 思想の根本的斷定

觀事實を吟味して此れが果して思想の根本斷定と符合するものなるかを究めざる可からず。思想の根本斷定を此處に再び記述せば之を左の如く言ふを得べし

(數者事物の)狀相の同一なる點は存在に於ても亦た同一にして、數個狀相實は是れ一個の存在なり。例へば甲物の a 狀相と乙物の a 狀相とは同じ a 狀相なるが故に同一の存在を有す。而して其狀相の同一絶待的なるときは存在の同一も絶待的なり。

客觀事物に就きては前きに實在論に於て大要講究せり。雖此にまた其肝要なる部分を再述せば、客觀の現象は其實吾人が主觀的表象なるも、主觀外の實在に基きて存する者にして該實在の表現せる者と見るを得べし。而して實在は

維多なり。雖同時にまた純一にして。差別の裡に無差別あり。差別は是れ其儘にて無差別たるなり。故に實在には、現象界に於ける如き同一て、事なく、同一は是れ純一にて、即ち絶対的同一なり。現象界の同一は絶対的同一にあらずし、て兩者又は數者間の同一なるが故に同一なる者別の存在を有すれども、實在にあつては同一なるものは別の存在を有せず、即ち純一存在なるなり。現象界にあつては同一の物同一の存在を有せずして、時處的位置を異にす。是れ現象の虚妄なる所以にして、其等事物は實在に於ては其相同じき點に於て全く同一物たるなり。例へば予が今有する此机の感覺。昨日有したる同感覺は時を異にせる別個感覺なれども、感覺されし者即ち實在は別物にあらずして同一物なり。

るが如し。又甲の鏡に映じたる者。乙の鏡に映じたる者と。兩者別個の寫影なれども、其實物は之れ同一なるが如きもの。即ち實在の同一なるなり。現象事物間の同一(即ち同一状態)は實在にあつては全く同一にして、即ち純一存在なれども、吾人の感覺が此絶対同一を破りて之を別現するによりて、別個的に見ゆるなり。異者間に於ける状態の類似あり。又は同性質の別物あるが如き、且つ同一物が時を異にし處を異にして見らるゝが如き、これ皆な感覺作用に由りて實在の同一物が別個に見らるゝが爲めに然るものことす。客觀の事實右説述するが如き者なり。こせは、思想の根本斷定が之と符合すること一見して明なり。云ふべし、事物状態の同じき點は存在に於ても同一なり。是れ思想の根本斷



思想の合  
作用は  
心識の  
純性は  
基礎に  
く

じき者を存在に於ても同一となし行く、是れ事實の全體にして、此外思想に何物もあるにあらず。而して斯の如き積極的合作用は如何にして生じ来る者なるか。是れ以下講究の問題なるが、予輩は此を心識の純一性に基きて生じ来る者となすなり。吾人の心識は純一なるが故に、異なる者は異なる者として別個に之を認識するも、同じ者は之を同一に認識せざるを得ず。同一に認識すとは何ぞ。認識其物の同一なるを曰ふなり。吾人は馬てう認識を二つ有する能はず。吾人が馬の認識は一なり。同一心は同じ物の別なる認識を有する能はず。即ち内容同一なる二つの認識を有する能はず。内容同一なる別個の認識あり得ん爲めには、二個の心なかる可からず。異なる者については吾人は甲物の認識と乙物の

の認識と二個の認識を有すれ雖、兩物の相同じき點例へば白色てう事についての認識は一なり。是れ認識する心の一なるに由る者にて、純一なる心は同じものを別個に認識する能はざるなり。異物の認識にあつては認識する心は同一なるも、認識さるゝ所異なるが故に、全く同一の認識たる能はざるも、同じ者の認識にあつては、認識する心既に同一なるが上に認識さるゝ所亦同一なるにより、到底同一の認識たらざるを得ざるなり。以上固より是れ心理上の事を言ふ者にあらずして、只に認識上の事なりと知るべし。而して斯の如く同じ別物を純一的又は無差別的に認識する者即ち前きに所謂思想の積極的合作用なるが故に、思想の積極的合作用は心識の純一性に基く者と云はざる可から

ず。只だに思想の合一作用のみならず。差別的、感覺作用も、亦た主觀の純一性に基く者となすを得べし。何となれば、二物に接して、二物の異なるを知る者は、知る者の一なるに由るものにて、知る者の純一性なくんば、二者を對照比較して、其異を知る可からざればなり。かくの如く、認識作用は全體に於て主觀の純一性に基く者となすを得るなり。

思想の純一性  
 實基の純一性  
 和待の純一性  
 實基の純一性  
 思想の純一性

然るに心識の純一性は心識作用(即ち主觀的活動)の本體たる世界的實在の絶対性又は無差別性に基く者にして、且客觀的實在の純一性又は無差別性も同じく世界的實在の其れに外ならざれば思想の合一作用と客觀事物の同一性とは絶対實在の無差別性に於て同一の基礎を有する者にし。て思想と客觀的事實との間に調和の存する所以自から明

なりと云ふべし。即ち狀相の同じきものが存在に於ても同一なるは絶対實在の純一性に基くものにして、思想の合一作用亦同じく絶対實在の純一性に基くが故に、思想と客觀的事實との調和の基礎は即ち絶対實在の純一性にあり。すべきなり。

## 第四編 人生論（一名實行哲學）

### 第一章 人生ノ目的

世界は雑多の活動より成れる一個の大活動なる事は已でに論じたる處なり。凡そ活動は内性の衝動に基き之を満足せしめんが爲めに生ずる者なるが故に、世界の雑多活動は各々自己の内性的衝動を満足せしめんが爲めに存し、之を以て其目的とす者ならざる可からず。然るに一方より考ふれば世界の雑多活動は其實同一の活動なるが故に、總て之れ同一衝動に基き之を満足せしめんが爲めに生じたる者ならざる可らず。故に雑多活動の根本たる雑多衝動は世界の大根本的動機たる一衝動に基き之より派生したる者

万有の理想目的

にして、各個の差別的活動は自己の特殊衝動を満足せしむるに由りて世界的大衝動を満足し得べく、且つ斯くして此れを満足せしめんが爲めに生じ來れるなり。蓋し世界的大活動は雑多活動以外に存せず。雑多活動は夫れ自身の衝動を満足せしむるに由りて世界的根本衝動の満足を得せしめんとする者なればなり。左れば個々万有は結局世界の大目的を成就せしむるを以て自己の目的とし全く世界の爲めに存する者なり。雖、此目的を達する爲め又た自己特有の目的を有し、此を成就するに由りて世界の大目的を成就し、世の進歩發展を來す者なり。或は進歩其物を万有の目的とす者あり。雖、こは非なり。進歩とは万有が其理想目的に接近し行くの謂にして、先づ目的ありて後進歩ある可く

進歩夫自身が目的たる能はざるなり。万有の目的は各々自己の根本衝動を満足せしむるに由りて世界の最根本的衝動を満足し世界の無意識的理想を實現せんとするに存するなり。(以上意志ヲ世界ノ根本トナス第一編ノ所論ト對照スヘシ)

的  
人生の目

然れば人生の目的亦た知る可きなり。個人的生活もまた世界的維多活動中の一活動なるが故に、之れ亦た自己の内性的衝動に基きて存し之を満足せしめんが爲めに生じたる者となさざる可からず。故に人は自己の本性的傾向を満足せしめ、自己の欲する處をなさば可なり。己が性慾の向ふ處悉く之をなさんとするニ―チエ流自然主義の如きもまた大に眞理を有する者となさざる可からず。人は各々自己本來の理想を發揮し本性的發達を全ふせざる可からざ

ニ―チエ  
主義

るなり。然れ雖之れが爲め吾人所有の慾望は悉く之を満足す可しとなすは非なり。自然主義は只だに眞理の半面を窺へる者となふべし。人生は其根本的衝動即ち其の無意識的  
根本理想を實現する爲めに存する者なるも、人生の根本的衝動は世界の根本的衝動に基き之と同一なるが故に、結局人生は世界の衝動を満足し世界の理想目的を成就せしめんが爲めに存する者にして全く唯我主義の者にあらざるは己でに論じたる處に由りて明なり。而して世界的根本衝動は純一にして、維多的世界活動は只だ之を満足せしめん爲め維多に活動する者なるが故に、世界の根本衝動は之を満足せしむるに由りて世界的維多事物の調和合同を來たす者ならざる可からず。従つて世界的根本衝動を満足し自己

の目的を成就する。人生の活動は其結果自然に他活動と合同す可き者とす。故に人生の根本衝動即ち吾人の眞我本性なる者は之を發展するの結果吾人を他と合同せしめんことを傾ある者にて孤立的。主我的の傾向を生ずるものなるべからず。之を吾人現有の心情中に求むれば吾人の理性的情念即ち所謂道義心なる者の如き之れ人生の最根本的衝動となすべきなり。理性又は道心が人心の最深衝動なるは又た事實の上に於ても認められ得べき事とす。凡そ自然的情念は何れも人の本性に基ける者にて即ちその根本衝動の發現なり。雖或情念開發の結果は往々其根本的傾向の外に逸出する事あり。斯くの如き者にあつても其が本來の傾向は常に其勢に反抗し逸出を制止せんとする者にして

道義心は  
人生の根  
本衝動な  
り

自我實現  
の意義

之を理性、道心又は良心と云ふなり。去れば吾人の情念は吾人の理性又は道念に逆はざる者のみ吾人が眞我の發現にして圓滿に此等心念を實現するを以て人生の目的となすべきなり。故に人生の目的は自己の慾望を満足し自己の理想を實現するにあり。となし得べきも如何なる慾望も満足す可し。とはなす可からず。吾人は只だ道心若くは凡ての合理的慾望をのみ満足すべきのみ。

之を要するに人生の目的は自我實現又は根本的理想の實現に存す。となすべきも吾人の自我實現は即ち世界の自我實現にして、且つ世界的自我の實現は雜多事物の合同を來し以て世の所謂進歩を來す者なるが故に、吾人の自我實現は即ち自他合同、事物進歩てう事と同一事なり。となすべき



人生の目的は二様に認識するを得

なり。故に人生の目的は之を客觀的方面より云へば世の事物の進歩を來すにありと云ふを得べく又世界の目的を成就するにありともなし得るなり且又吾人の根本的理想は即ち世界の理想にして世界の理想は即ち萬物個々の理想なるが故に人の理想は萬物の理想と通じ根本に於て之と同一なりとさざる可からず殊に人の理想と社會の理想との同一なるは頗る明白にして個人の理想は社會より與へられし者ともなし得るなり殊に道德的理想の如きに於て最も然りとす故に人生の目的は人々各自の理想を實現するにありとさすの外又社會又は世界事物の理想目的を實現するに在りとなすを得るなり斯くの如く人生の目的は一なれ雖別の方面よりして之を二様に認め得べし従つ

て吾人が行爲の標準の如きまた之を二様に説述し得べきものごす。

### 第二章 幸福論

人生の目的は人生の根本的衝動を満足するにある事上に言へる如し而して人生の幸福は其根本的衝動を満足して人生の目的を成就するに存すとなさざる可からず人生の根本的衝動は既に論じたる如く人の善美なる心情殊に道義心に於て最も完全に發現せる者なるが故に人生の幸福は即ち善美なる心情殊に道心(以下道心を以て)の満足を得るに存せざる可からず人生の幸福果して斯くの如き者なるに於ては人生の幸福は道を愛し善を行ふ者の最も多く享

有し得る處にして、世に善人程幸福なる者ある可からざるなり。然るに世或は善行と幸福と一致せず善人必ずしも幸福ならざるを嘆ずる者あり。之れ幸福の见解を誤れるに由るなり。彼等は幸福を以て單に快感にありとなし且つ富貴權勢等のみを以て之を得るの要件となし。然るに善人は必ずしも富貴榮達を得る者にあらざるを以て。彼等は止を得ず未來の望を提起して善人は來世に於て必ず大なる快樂を享有すべき者となし、以て僅かに慰藉の道を發見せんとするなり。

幸福を以て快樂にありとなしは殆ど普通の见解なるが如きも之れ大なる誤謬なり。人生眞の幸福は快樂と如き感覺的事實に存するを得べからず、何となれば凡そ吾人の感

幸福は快樂に存せず

覺は一時的にして永久ならざるを共に又た關係的にして反對を豫想する者なればなり。例へば吾人が光明を感知するは暗黒に對し之を知るものにして、暗黒を知らざる者は假令光明の中に在るも光明を知らざるなり。吾人が快樂を感ずるも不快樂あるに由る。不快樂なくして快樂あるを得べからず。且又快樂は一時的にして永く之を感ず可からず。絶へず或快樂の中に在る者は終に慣れて之を感せざるに至るのみならず爲めに却つて不快を招くに至るなり。然るに眞の幸福は永久なるを得る者ならざる可らず。一時的ならざるを得ざる者は全き幸福たるを得べからず。一時的のもの之を得るが之を失ふてう不幸の源なればなり。又た眞の幸福は不幸を伴はざるを得る者なるべく、不幸なくし

て存す可からざる幸福は之れ眞の幸福なる可からず。之れ等總て是れ自明の眞理なりと云ふべきなり。故に眞の幸福は決して之を快樂に在りとなすべからず。論者或は曰はん。快樂は不快樂を豫想するも、幸福も亦た不幸を豫想するにあらずや。故に幸福も快樂及其他の感覺的事實と同じく反對を豫想し之に基きて存する者にあらずやと。然らず。凡そ一が其反對に基きて存するは只だ概念上又は感覺上の事にして、即ち吾人が其物を概念し又は感覺する上にのみ存する事とす。決して事物其物の存在に斯の如き道理あるにあらず。故に幸福の概念又は認識は、不幸の概念又は認識に基く。雖、幸福の事實は必ず不幸の事實に基く可き者にあらず。單に認識上の道理を事物存在の上に

眞の幸福  
は満足に  
あり

認識せんとするに由りて古來々種の詭辨あるを見る也。眞の幸福は快樂てう如き感覺的事實にある可からずとせば、予輩は之を快感の本源たる満足にありとなすの至當なるを認む。満足は不足缺乏を感ぜざるを云ふ者にして、最も幸福の概念に適合すればなり。此處に満足と云ふは固より満足の事實にして、満足の感を云ふにあらず。満足の感は快感と同じく苦痛不満足の感に基けば也。快感は満足に基け雖、満足は常に快感を伴はず、快樂又は満足感は缺乏を満たしたる瞬間に存する者にして、一時的なれ雖、満足は永續し得るなり。而して永續せる満足には著じき快感の伴ふ者にあらず。常衣を着し常食を喫し日常不足なき生涯を送るが如き、別に之れ快樂を感ずるに非ずと雖、而かも之れ吾人の

幸福たるを失はざるなり。

以上予輩は人生の幸福を以て満足の事實にありとなせり。満足には積極と消極の二種あり。服従的満足の如きは消極的満足にして自己の慾望を満足するものは之れ積極的満足なり。而して兩者吾人の幸福たるに於て異なるなし。雖然かも兩種共に悉く眞の幸福なりとすべからず。天命に對する服従的満足の如きは之れ人生の最大幸福なり。雖墮落的境遇などに對する服従的満足は之れ眞の幸福となすべからず。又或心情の満足は眞に生を幸福ならしむる者なるも或慾念の満足は然らず。予輩は前きに道心の満足を以て人生の幸福となせり。眞の幸福は只だ道心理性の命令に服従し之を満足せしむるにあるなり。故に吾人は道心及び

總ての満足  
眞の幸福  
にあら  
ず

總て之に背反せざる諸情の満足をのみ求むべく道心に背反する諸慾の満足は却て人生の不幸を來らす者なり。蓋し人生の完き満足は人生の根本的衝動の満足に由て得らるべき者なるが故に、幸福を以て満足にありとなす以上、該根本的衝動に背反する諸動機の満足は人生に不幸を與ふる者。云はざるべからず。而して人生の根本的衝動は己に言へる如く之を満足せしむるに由りて維多の存在を合同し個人的存在を消滅せしむる者なるが故に、只だ個人的自我にのみ執着して之をのみ保存し満足せしめんとする絶待的主我心(即ち諸種不徳なる利己的又は肉慾的心情)の如きは人生の根本的傾向に背反せる者にして、人生根本的の傾向を満足せしむるものは道義心及び之に背反せざる諸種

道心の満  
足

の心情ならざる可からず。道義なる者は元來吾人自他を合一せんとする者にして道義心の満足は全く個人的自己を去るに非ずんば得べからず。之れ道義心が人生根本的衝動の最大なる發現たる所以とす。故に人生の幸福は只だ道心及び之に背反せざる諸動機の満足に存す可なすべきなり。道心の満足は所謂己れを去り道心又は理性をして全く己たらしむるに由り得らる可き者にして而して己を去り道心に歸するは其實己を去るにあらずして却つて之れ眞我を實現し且つ永生を得永遠の幸福を得る所以なり。蓋し道心の本體は吾人並に世界の實在にして常住不變の者なればなり。抑も己れなる者は自己の滅亡に由りて更に大なる自我を實現せんが爲めに存する者にして自己の消滅を目

來世的信  
仰の不要

自殺の不  
可

的とする者なり。故に之れ一時的の假象にして終局の自己に非ず。而して吾人は之れが消滅に由て幸福を享け永生を得るが故に個人的永生は眞の幸福を妨害する者にして或宗教の信する如き來世の存在は吾人の幸福に必要なものにあらず。然れ雖個人的自我を消滅する事強ち幸福なりと可ならず。幸福はたゞ自己を去る事に存せずして道心の満足に存するが故に道心發達の結果自我を去るは可なり。雖自殺の如きは幸福に至る道にあらず。何となれば之れ道心を満足する者にあらずして之を亡ぼす者なればなり。道心の満足は該生活に由つて得らる可き者然るが故に、生命と健康は幸福を得るに必要な者なり。只だ吾人の生命を捨つ可きは之に由つて道心の満足を得らるべき場合

又は之に由つて自己存在の目的を達し職務を果し得る場合にあり。正當に己を去るは只だ己を滅するにあらずして之をして更に高大なる者と成らしむるなり。小我に死して大我に生き、以て滅亡の境涯より常住の地に移り行なり。個人的自我は到底亡ぶべき者なるが故に、吾人は早く之を去て道心に歸し、以て常住の眞我に到らざる可からず。若し此小我に居て永生を望み幸福を願ふ者の如きは、恰も怒濤逆巻ける海中に流出せんことを筏上にあつて、不死永生を望む一般なり。早く安全の陸上に飛び移るを要す。

以上主として道心の満足云へるも、道心に背反せざる合理的諸情の満足が眞の幸福なる事も亦た之を言へり。個人的差別の現存する限り利己的諸慾念も或範圍を限り之を

内部的幸福  
と  
外部的幸福

満足せしめざる可らず。従つて金錢名譽地位權勢等を得る亦た之れ或根本衝動を満足せしむるものにして眞の幸福たるを得るなり。只だ之れが何處迄も幸福なるにあらざるを知らざるべからず。左れば人生の幸福は實際上兩種類に分つを得べし。一は道德的又は知識的満足の如き精神の高尙なる満足に存する者にして、一は肉体的満足を基礎とするものなり。假りに前者を内部的幸福と謂ひ後者を外部的幸福と謂ふを得べし。至き幸福の生涯は同時に兩種幸福を兼有せざるべからず。以下兩種幸福の性質につき尙ほ聊か攻究する所あらんと欲す。

道心理性は人性の根本衝動の最大發現なるが故に之れの満足に存する内部的幸福が外部的幸福よりも大なるは言

内部的幸福は人物の價値に關する

を俟たず加之、内部即ち精神上の幸福は品性の發達、智能の開發に由て得らるべきものにして、即ち教育の結果に由りて得らるべきが故に、内部的幸福は何人にも勉めて得らるべき頗る平等的性質のものにして、之を得るに否かは其人の力量に由る處頗る多し。故に内部的幸福を有するに否かは大に人物の價値に關係あるものごとす。然るに外部的幸福にあつては或範圍迄は平等的にして何人も努むれば之を得べく、從つて之を得ざるは人物の劣弱なるを示せども、其範圍を越ゆれば人自由に之を得べからず、從つて之を得ざるの故を以て人物の價値を輕減せざるなり。

抑も地位權力富貴等の如き物質上の幸福は品性智能勤勉等に由りて或程度(精神的幸福に必要なる程度)迄は何人も之を享有し得るも

外部的幸福は運による

智能品性は外部的幸福を得るに必要なり

其程度を過ぐれば人力之を如何にもする能はず、或は技能と勤勉とに由りて之を得る事あれども、勤勉なるもの必ずしも之を得るにあらず。智能と品性また成功を必ずしも或は單に父祖の余澤に由るあり、無知過誤、甚しきは悪手段に由るもありて、之を得るの道極めて一樣ならず。多くは、之れ亂雜、不合理なる、自然の不可知の事情(即ち所謂運)に由るものにして、個人の方に基く處少し。從つて富貴權勢は、個人の眞價値を表はさず、品性の如く貴からざるなり。

然れ雖品性智能勤勉は外部的幸福を得るに全く無能力となすべがらず。大部分は運に基くとするも人力に基く處またなきにあらず。全く無學無能なるものは如何に運が轉ぶとも國務大臣と成る能はざるなり。運に基く處ある故に知

と善亡んで愚と悪榮ゆる事あるも若し他の事情同一ならば智能品性優秀なる者の勝つべきは論を俟たず而して運は有徳者にも不徳者にも一樣にして有徳者に不遇あること同じく不徳者にも災害あり榮達は必ずしも有徳者に來らざる如く不徳者にも來らず故に人の貴ぶ知能品性を備ふるものは然らざる者よりも榮達に多くの可能を有すと言はざるべからず徳ある者は如何に不遇なるも既に其徳の証明さるる以上一朝機會に遭遇せば顯著なる榮進を得る事世に住々實例あり而して徳と努力に由て得たる幸福は輕々に去らざるも運に由て來る者は運に由て去る不徳や過誤に由て得たる者の永續し難きも常に認めらるゝ事實なり。

世界は意志感情の妄動なり

道理の力

世界の事物亂雜にして不合理多し。雖世の進歩と共に悪が成功する機會滅し行くなり。(第一節參照)世界の實際は意志と感情との妄動にして理性の光朦朧たり意志感情の衝突融合は恰も波浪の起伏常規なきが如く正理の支配至つて微少なるが故に一種の知覚と能力あるものは品性の如何に拘らず巧みに此間に處して成功し得る事あれども事物の進歩は理性の發發を伴ふが故に正理の力は何時迄も微弱なるべきにあらず加ふるに正理の力は微弱にして微弱ならず微弱なるも久しきが故に結局強し惡盛なる時は正理の力一時壓倒せらるるも其が常住の恢復力は恰も雨滴の石を穿つ如く終に効を奏せずんば止まざるなり知る可し品性の力到底否定すべからざるを勤勉もまた同一なり。



勤勉せずして得らるゝ事あるも勤勉せねば得られざる事もあるが故に、不斷勤勉を廢すべからず。

知能品性勤勉は物質的幸福を得るに必要なりと雖、物質的幸福は人力のみにて充分得べからざるは既に之を言へり。故に物質的幸福は精神的幸福の如く矢鱈に求むべき者にあらず。然れ雖求めざれば來らざるが故に求むるを不可とせず。要は理想に執着して現實を棄却せざるにあり。理想を愛慕すると同時に現實の價値を認め之を愛せざるべからず。人は、現有の幸福を充分に受得せずして、不確實なる幻影を追求するが故に、現在の不幸と共に、未來の失望を招くなり。現在主義の必要知るべきなり。人は得意のとき、現在を樂めども、失意の時、現在を樂む事を知らず。故に、失意なるな

り。蓋しよく現在の價値を認め、現在に満足するは容易なる事にあらず。現在主義は大なる知力と訓練又は徳性を要する處あり。凡そ何れの處か快樂なからん。只だ之を樂み得る力ある者之を樂むを得べし。故に一種の力を養ふ者は無限の快樂を有して、斷へず現在を樂むを得べきなり。品性知能勤勉と現在主義の四者同じく外部的幸福の受得に切要のもの云ふべきなり。

品性修養は内外幸福の爲め最大の必要條件にして、高尚なる品性が最後の勝利者たるべきは世の進歩と共に益々確實の眞理たらんとす。善者は只だ忍耐にせは決局の勝利者たるを得べし。又た善行は決して報酬を失はず。人の知らぬ善行は行爲者の品性を高め次の大善行の基礎となりて

他日の幸運を持來すなり。善者の勝利。他即利己。是れ奮闘的勇士の確守すべき二大信條なりとす。

### 第三章 道德論

(一)

行爲の善悪は結局、生活の目的に由て決定さる可き者にして、人生の目的に合する者は善、之に反する者は悪なる可きなり。而して人生の目的は既に言へる如く人生の根本的衝動を満足せしむるに存するが故に、行爲上善悪の標準は行爲が人生の根本的衝動を満足せしむると否とに存せざる可からず。然るに人生の根本的衝動は人生の究竟的理想を實現せんとする者にして意識的の者にあらず。而して吾人

行爲善悪の根本標準

社會的理想の實現は吾人の行爲の標準なり

が意識的の衝動は總て之れより派生せる一時的の者なるが故に、吾人は吾が何れの衝動に従ふが最も根本衝動を満足せしむる者なるかを断定する事容易ならず。然るに人生の根本的衝動は即ち世界の根本衝動にして、各人に普通共同の者即ち社會一般的の者なるが故に、最も根本的なる意識的衝動は諸人に通じて同一なるべく、各人を通じて同一なる意識的衝動は最も根本衝動に近き者ならざる可からず。故に道德の標準は各人通有の意識的衝動即ち社會の意識的理想の中に之を求めざる可からず。即ち吾人は個人的行爲に關する社會一般の理想、換言せば社會の道德的理想を以て、吾人行爲の標準となし、之に従ふを善となすべきなり。

然るに予輩は前きに個人的意識内の道德的衝動即ち所謂道心を以てまた人生の根本衝動の完き發顯となし之に従ふの善なるを明言せり。蓋し道心なる者は一種の理性的働作にして、理性が物を合一し實在の無差別性を實現する者なるは前編理性論に於て之を言へり。而して認識的に之を合同し實在の無差別性を認識的に實現する者は是れ認識的理性にして、實行的に然かなす者之れ實行的理性なり。道心は即ち實行的理性の働なるが故に物を正當に合一し行く者とす。而して世界の根本衝動は之れが満足さるゝと共に世界事物の正當合一を來たす者なるが故に、道心は即ち世界的根本衝動の完全なる發現なりとなし得可きなり。且又社會の道德的理想は個人の道德的理想より成立せる

道心も同

者ともなし得べく、又た個人の道德的理想は社會の道德的理想に基ける者とも曰ひ得べし。何となれば人は皆な初めより社會の内に生れ社會の内に在りて養成さるゝ者にして、人の知識觀念は皆な社會より與へられ、其善とし惡とする處亦た社會の善とし惡とする處に従へばなり。故に個人の所謂道心と社會の道德的理想とは同一にして兩者同じく吾人が行爲の標準となすを得べきなり。

個人の道德的理想と社會の道德的理想とは兩者同じく根本的衝動の比較的完全なる意識的發現にして且兩者實際同一なるが故に兩者同様に吾人行爲の標準たるを得べし。雖時として兩者の衝突する事なきに非ず。而して兩者互に衝突する時は吾人は大概社會的理想を重んぜざる可か

らず。何となれば社會の善とする處は多數の人の善とする處即ち多數道心の一致する處なるが故に、一人の善とする處社會の理想に同じからざる時に於ては、社會理想を以て根本衝動に近き者となすべきなり。蓋し根本衝動は純一なるが故に各人を通して同一なる者最も之に近ければなり。去れど又時として一人の道徳的理想が一般の理想よりも根本的なる事あり。傑出せる人の道義心は一般よりも遙かに發達せる事あればなり。故に一概に社會的理想を重しとなす可からず。雖、而かも後者の場合は稀にして普通の場合に於ては人は社會的理想に従ふを可とするが故に普通道徳の標準として社會的理想を重んずる事を獎勵すべきなり。

(二)

古來道徳を論ずる者に二種あり。一は行爲の善惡は動機の側面にありとなす者にして、他は結果の方面ありとなす者也。前者は曰く行爲の善は義務を單に義務たるが故に行ふ事に存する者にして、義務意識に基ける行爲は其結果の如何に拘らず善なり。然るに行爲には又た結果の善惡あるなり。或る殺人は動機の如何に拘らず惡なり。父母を養ひ又は職務に忠實なるは動機の如何に拘らず其事自身善なるなり。又た國法に導ひ租税を納め負財を償ふ如きは外部的に定まれる義務にして、假令吾人は之が義務たるを知らず。雖、行はざる可からず。故に善行は必ずしも義務意識に基かざるなり。凡そ義務は多く外部的客觀的に定まれる者に

して、吾人自身の所考如何に拘らず之を行ふべく、而して之を行ふ者は其か如何なる意識に基けるに拘らず善なるなり。故に行爲の善は只だ内部動機にのみある者なり。となすべからず。道德には全く外部的に存在し、外部より吾人を束縛する者あり。之を道と云ふ。然れども道德はまた只だ外部にのみ在る者にあらず。行爲の善悪は只だ結果の如何に由りて判定さる可き者にあらず。たゞひ結果に於て如何程善き行爲なりと雖其根本動機にして悪なるときは之を完全の善行と云ふ可からず。且つ吾人は或動機より出づる行爲を見て結果の如何に拘らず嘆美稱讚する事多し。而して其動機上の善は行爲の結果より來らずして動機其れ自身に存する者とす。即ち理性の束縛に従ひ自己の根本衝動を満

眞の善行  
は道と徳  
とを全ふ  
すべき也

足せしむる事に存するなり。故に動機に於て理性に反し自己の最高理想に背きて卑劣なる慾情に従へる行爲は結果の如何に拘らず吾人之を擯斥し、下等の情慾に打勝ちて高等の思念に従へる行爲は其結果の如何を問はず之を高潔なりと稱讚するなり。而して此内部的善行は之を稱して徳と云ふ。外部的の標準は道と云ふ。道德は讀で字の如く道と徳を併せ有する者にて、善行は外部的結果に於て善なると同時に、又た其動機に於て自己の比較的、最高理想を實現する者ならざる可からず。然らずして只だ其一方のみ有する者は眞の善行なるべからず。

以上論ずる如く行爲上の善悪は動機にも存し結果にも存する者にして動機又は結果の一方にのみありとなすは誤

道徳と  
は相伴  
隨す

謬なりと雖、動機上の善と結果の善とは實際上概ね相伴隨する者にして、善動機に基ける行爲は多く其結果に於ても善なりとす。故に行爲の善惡を動機にありとする者と結果に在りとなす者と其實行的結果に於て左程の相違なく、何れも之に従つて實行上に甚しき誤りなきが如し。然れ雖善動機と善結果の伴隨は只だ概して然る者にして必しも然るに非ず。たゞ多數の場合に於ける事實にして凡ての場合に於て然るにあらず。故に嚴密に論ずる時は動機論と結果論とは何れも夫れのみにて實行上安全なる道徳的標準を與ふる者に非ず。然れ雖同時に二個の標準に従ふは實行上不都合なる者あるが故に、吾人は他に一層完全なる實行的标准を求むべき必要ありと云ふべし。而して實行上完全な

る標準は同時に右の兩種善の標準を含有する者なるべきや論を俟たず。

更に之を形而上の方面より考ふるも、人生の目的は一方より云へは自我の實現にありとなすを得べく、他方より云へば世の統合を助成し物の進歩完成を助くるにありとなすを得る者にして、人生の目的に合する行爲(即ち善行)は一方より見れば個人の眞我を實現せる者なるべく、又他方より見れば世の進歩を助成する者なるべきなり。斯くて善行は動機と結果の兩面に於て夫れくの標準を有し同時に兩標準に合す可き者ならざるべからず。然れ雖形而上の事實に於ては自我實現と世界進歩とは同一事にして、自我實現の行爲は即ち是れ世の進歩を助成する者なるが故に、兩者

は何れも夫れのみにて完全なる道徳的標準たるを得れども。こは形而上的即ち理想的の事にして實際の事に非ず。吾人が實際の自我實現は眞の自我實現ならざる事あり。又た吾人が認むる進歩は時として眞の進歩ならざる事あればなり。故に實際界に於ては兩者標準を併用し一に由つて他を補ふの必要ありて、其一にのみ由るべからざるが故に、完全の道徳的標準は兩者標準を含有する如き者ならざるべからず。以下完全の標準につきて尋究を試みんと欲す。行爲結果上善の標準は世の事物の進歩完成を來たすにあり。こなす。雖此は只だ理論上の事にして實際如何なる行爲が世の進歩完成を助成する者なるかを判定するは容易なる事にあらず。吾人は如何にして一行爲が實際世の進歩

結果的善  
實際的  
標準は  
社會的  
理想に  
あり

を助成するものなるを知り得るか。行爲の結果を尋究して之を知るは理論上不可能の事なざる可からず。蓋し事物の係は複雑無限なるが故に行爲結果の廣漠たる到底究む可からざる者なれば也。予輩を以て之を見れば結果的(又外部的善の實際標準は之を社會の道徳的理想に求め、社會の道徳的理想に適合する者を以て最も世の進歩發達を助くる者なざる可からず。何となれば凡そ社會の理想なる者は社會の進歩を指導する者即ち其の實現に由て社會の進歩發達を來す者なればなり。此れ總て理想なる者の性質にして物の自然的理想は何れも其物進歩の標的なり。こす。また之を實際上より考ふるも社會の理想なる者は社會の維持及其進歩發達の爲め實際の必要に基づき實際の諸

事物に就て自然に構成さるゝ者にして且つ多數の人が自然且必至的に可とする處なるが故に、該理想の實現は社會實際の發達に最も必要且適切の者ならざるべからず。左れば社會の道德的理想に従ふ行爲が其結果に於て善行なる可きは頗る明かにして、行爲結果上善惡の標準は之を社會の道德的理想に求むるを以て最も容易且適切なりとなすべきなり。

次に動機上善の標準即ち最高理想の實現てう事に就きて之を考ふるに、吾人の最高理想即ち道德的理想は根本的に社會の道德理想と同一なるのみならず、經驗上に於ても人の道德的理想は社會の道德的理想に養はれ又は之に基きて生ずる者なるが故に、兩者は之れを同一なりとなし得べし。

動機上善  
の最大標  
準も同じ

完全なる  
實行的標  
準

し。加之、眞の自我實現は社會の進歩と一致する者なり。而して社會の道德的理想の實現は個人の道德的理想の實現よりもより多く社會の進歩と一致するが故に、吾人は社會的理想を以て個人的理想よりも尙ほ根本的にして一層吾人の眞我に近き者なりとなさざる可からず。従つて社會的理想に従ふは個人的理想に従ふと同じく否な時としては之よりも多く吾人の眞我を實現し動機上善の標準に合する者となさざるべからず。然らば社會の道德的理想に従ふは同時に結果上善と動機上善の兩標準に合する者にして、實行上完全なる道德的標準は即ち此處に存すとなし得べきなり。

道德の實行的標準は斯くの如く社會の道德的理想に求む



可しと雖。社會の道德的理想は個人の道德的理想と同一なる事既に之を言へり。然れども個人の道德的理想は時として社會の道德的理想と相反する事なきにあらず。而して社會的理想は個人的理想よりも正確なるが故に人は常に社會的理想を學知して自己の理想を之に適合せしめざるべからざるも、時にしては個人的理想が社會的理想よりも卓越せる事あるが故に絶へず兩者を調和するの必要あり。是れ倫理教育並に倫理攻究の斷へず必要なる所以とす。倫理教育は個人理想を社會的理想に合せしむる者にして、倫理的攻究は社會實有の道德的理想を明にして倫理教育上の標準を與ふるに共に卓越せる個人的理想に由りて社會的理想を修正し行く者也。故に倫理學は理想の學たること

倫理教育  
と倫理攻  
究

同時に又事實の學にして實際の社會理想を究明する也

第四章 宗教論

宗教と道  
徳

善行と幸福とは一致するが故に、道德と宗教はまた一致せざる可からず。蓋し宗教は人生最後の安心と満足を求むる者にして、即ち人生最上の幸福を求むる者なればなり。然れ雖兩者はまた全く同一の者に非ず。道德なる者は前章論じたる如く吾人の最深衝動を満足し吾人の最高理想を實現する者なりと雖、該衝動該理想は其實外部小我より見てよ、吾人を強ゆる者なるが故に、道德は外部的強制に由りて小我を大我(根本自我)に合一せしむる者と云ふを得べきなり。然るに宗教は吾人即ち小我が自己の最上幸福を得んが

爲め自身より大我に合一せんとする者なり。換言せば、道德は善を只だ之が善なるが故に行ふ者にして、宗教は吾人自己の最上幸福を得んが爲めに之を行ふ者とする。宗教は現在の自我即ち小我の安心立命を希ひ小我の最上幸福を得んことを欲するに由りて存在する者なれども抑も小我なる者は世界實在の一时的不満足即ち世界的根本衝動を満足せしめん爲めに生きたる世界實在の一活動にして之を満足せしめて自己の本願成就すると共に大満足をして消滅して自己の本體なる満足的大我世界實在に復歸すべき者なるが故に換言せば小我は自己の消滅に由り更に大なる自我を實現せん爲めに存する者にして消滅に由りて其目的を達し自己の満足幸福を得る者なるが故に小我の最上

宗教は結局は徳に結ぶべきものなり

幸福を願ふ者は之を願ふが故に結局之を願はず所謂己を去りて道をのみ樂み終に小我をして全く大我に従はしめざるべからず故に宗教なる者は性質上結局道德に一致し自己を否定して道德のみとなるに至る可き者にして高等眞誠の宗教は實際に於て益々道德に一致し來りつゝあり然り。雖宗教は元々小我に基きて存し小我の幸福を求むる者なるが故に幼稚なる宗教にあつては小我的幸福の欲念強大にして且つ未だ之を満足せしむ可き道を知らざるが故に種々の物に依頼し種々の方法に由りて之が満足を得んとす。斯くて諸種の宗教は存するなり。然れ雖宗教の本性上述の如く小我をして終に大我即ち眞我に歸一せしむるに存するが故に如何に幼稚なる宗教と雖實際多少大我

を認得し、小我をして之に接近せしむる方法を講せざる者は、あらざるなり。只だ大我を認むるの完全なること不完全なることに由り、又は之に達せんことする方法の異なるによりて、諸種の宗教相異なる者ことす。而して大我の發現には心内に於ける者と心外に於ける者と二種あるが故に、之を外部的に認むること内部的に認むることによて、實際の宗教は二種に大別せらるるなり。所謂他力教の如きは即ち自己以外に大我を認むる者にして、自力教は自己の内部に之を認むる者なり。故に前者は客観的、他物的の大存在を認めて之に小我を一致せしめんことし、後者は自己の本性を神聖なる者ことなし、自性的開達に由りて自から高等の存在に到達せんことするなり。

前者は其思想客観的差別的なるが故に、其根本的信念現象的具體的にして、比喩的想像的の者多く、後者は其思想主観的冥想的なるが故に、其根本的信念抽象的無差別的なり。従て前者は迷信に陥り易くして、後者の方哲學的真理を有する事多し。然れ、雖前者(他力教)は世俗的にして、后者の如く超俗的ならず、客観的にして主観的ならざるが故に、后者よりも多数の人に適し、一般的救濟事業に於て成切し易く、頗る實用的なる者あり。要するに自力教は思辯に長ずるも、他力教は實行に於て優れる者あり。然れ、雖兩者は各々只だ大我の半面を認むる者なるが故に、完全の宗教は兩者を合一せざる可からざる也。之れを現在の諸宗教に就て云へば、世界最大の宗教たる基督教と佛教とは何れも未だ完全の宗教

にあらず。佛教は固より自力教のみにあらずして自力的思想あり、又たキリスト教も他力教のみにあらずして自力的思想之れ有り。雖、而かも根本的思想の特質より云へば、佛教は自力教にして基督教は他力教なり。故に基督教は殊に其根本思想に於て尙ほ大なる發達を要し、佛教は殊に其思想の形式及び實行の方面に於て尙ほ大なる發達を要す。而して兩者互に相接近するに由て兩者各々其發達をなし各自完全の宗教に近く事を得るなり。

神の信仰  
の正否

次に宗教的信仰の内容に就きて論ぜんに、多くの宗教にあつては人以上の或力が客觀に存するを信じ之に依頼して幸福を得んと欲す。而して該觀念の最も發達せる者を人格的神の觀念なりとす。人格的神の信仰は果して之れを正當

ご。な。す。可。き。か。實。在。は。純。一。無。差。別。に。し。て。總。て。外。物。の。本。性。な。る。ご。共。に。又。吾。人。自。我。の。本。體。な。り。現。象。以。外。の。存。在。は。此。の。唯。一。な。る。大。我。の。外。に。何。者。も。存。す。ご。な。す。可。か。ら。ざ。る。は。實。在。論。に。於。て。論。じ。た。る。處。な。り。而。し。て。大。我。は。吾。人。が。自。我。の。本。體。又。は。吾。人。の。眞。我。に。し。て。吾。人。以。外。の。も。の。に。非。ず。吾。人。の。自。我。即。ち。神。我。に。し。て。吾。人。以。外。に。神。な。し。ご。な。す。を。う。る。な。り。然。れ。ご。も。又。た。一。方。よ。り。見。れ。ば。大。我。は。吾。人。自。我。の。本。體。な。る。が。故。に。現。象。的。自。我。其。物。に。非。ず。故。に。之。を。大。我。ご。云。ひ。以。て。小。我。即。ち。現。象。的。自。我。ご。區。別。す。既。に。小。我。ご。異。な。り。故。に。之。れ。小。我。以。外。の。者。ご。云。ふ。を。得。べ。し。且。又。大。我。は。全。體。的。自。我。に。し。て。小。我。は。局。部。的。自。我。な。り。而。し。て。全。體。は。局。部。よ。り。は。多。く。を。有。す。る。が。故。に。全。體。的。自。我。ご。局。部。的。自。我。ご。全。く。同。一。に。あ。ら。ず。恰。も。國。